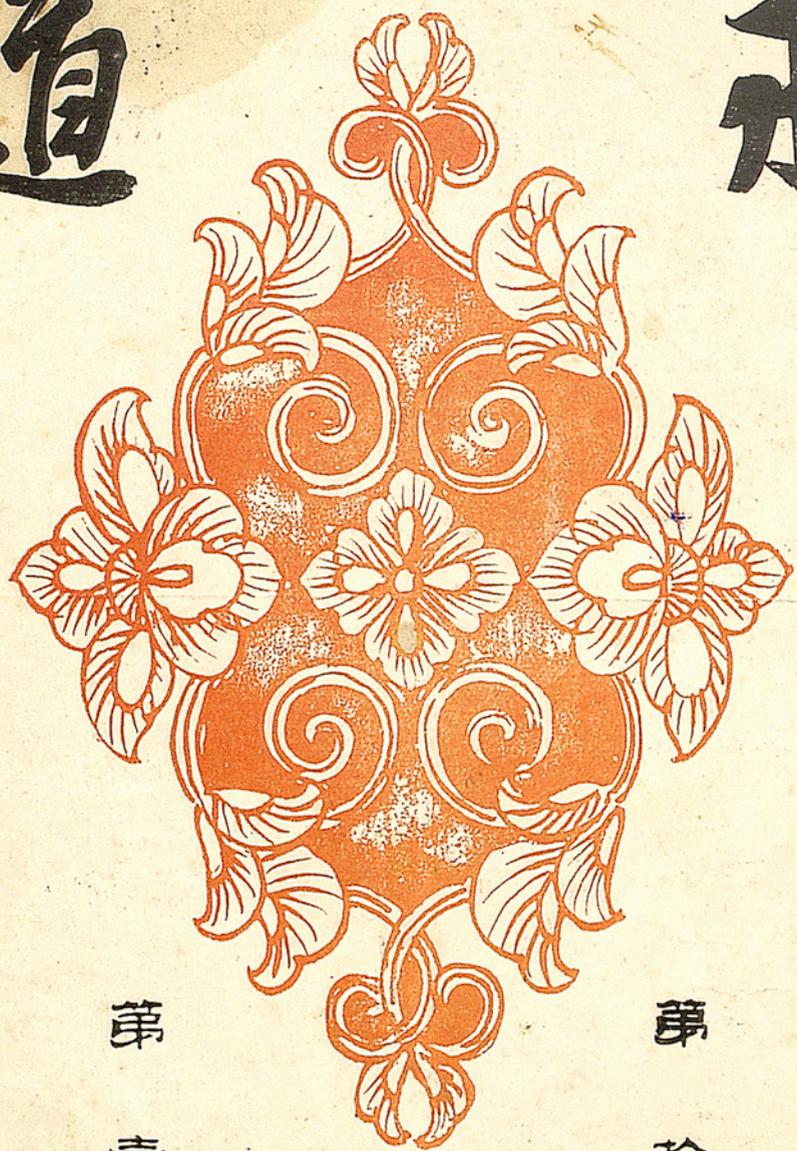


道

求



第
壹
號

第
拾
卷

大明正治四年十一月三十日十五日第三種郵便物認可
發行(每月一回廿日發行)

求道第拾卷第壹號目次

求道

●正眞の宗教

●眞俗二諦の交渉

序言

一 人生問題と信仰問題

二 信仰的實驗

三 信仰と道徳

四 國家と宗教

告白

●眞の同情者

●生存競争の世に眞の同情者を得たり

清水かつ子

橋本芳雄

●「教行信證」信卷三信釋

第四席

至心釋(法然聖人と親鸞聖人)

雜錄

●矜哀善巧錄

講義

近角常觀

近角常觀

講

求道學會

(本郷區藤川町一番地)

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

話

第三求道會

(日本橋區設町説教所)

求道

第十卷 第一號

正眞の宗教

正眞の宗教といふは救済の宗教である、救済の宗教といふは彌陀弘誓の救済である、如來廻向の救済である、是即正法である、是即ち眞宗である、蓮如上人御一代開書に曰く、聖人の御一流は阿彌陀如來の御掟なり、されば御文に阿彌陀如來のまほせられけるやうはとあそばされ候と、故に正眞の宗教は即ち阿彌陀如來の宗教である、第十八願の宗教である、選擇本願の宗教である、是即ち十方衆生救済の正眞の宗教である。

全體無上正眞道といふは無上菩提の大道、無上涅槃の極果を示されたる言である、經文につきて之を尋ねるに先づ法藏菩薩の發願を説きて曰く、時に國王あり、佛の説法を聞き、心に悦豫を懷き尋ち無上正眞道の意を發しき、國を棄て、王を捐て、行して沙門と作り、號して、法藏と曰ひきと。又如來永劫の修行を説きて曰く、國を棄て、王を捐て、財色を絶

去し、自ら六波羅蜜を行し、人を教へて行ぜしむ。無央數劫に功を積み徳を累ねて、其生處に隨て意の所欲に在り、無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を教化し安立して、無上正眞之道に安ぜしむ。是皆如來自ら無上正眞道を發願したまひ亦衆生をして無上正眞道に住せしめたまふのである。而して淨土往生の菩薩穢國に還來して利他教化を爲すに、亦衆生をして無上正眞道を立せしむるのである。還相廻向の願文に曰く、其本願自在の所化、衆生の爲の故に、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱し、諸佛の國に遊び、菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化し、無上正眞之道を立てしめん、常倫に超出し、現前に普賢の徳を修習せんと。此の如く絶対一實の大道、無上涅槃の極果を名けて無上正眞道とのたまふのである、信卷に曰く、横超とは即願成就一實圓滿の眞教眞宗是也、乃至大願清淨の報土には品位階次を云はず、一念須臾の頃に、速疾に無上正眞道を超證す、故に横超と曰ふと。是實に横超他力の至極、一實眞如の大行大信によりて無上涅槃の眞證に入る事を示し給ふのである。和讃に曰く、念佛成佛これ眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかすして、自然の淨土をえぞしらぬ。又曰く、信は願よ

り生ずれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたかはずと。は無上正道の因果を示されたるもので、畢竟するに眞實の教行信證往還二種の廻向皆是れ他力眞宗の骨目即ち絶對唯一の正眞の宗教と謂ふべきである。

猶親鸞聖人が此正眞の宗教を嘆じたまへる聖訓を釋ぬるに、教行信證總序には、圓融至徳の嘉號は惡を轉して徳を成す正智、難信金剛の信樂は疑を除き、證を獲しむるの眞理也といひ、又誠なる哉、攝取不捨の眞言超世希有の正法聞思して遲慮すること莫れといひ、教行信證の各卷此種の反復は枚擧に遑あらざることである。而して化卷には然に正眞の教意に據て古徳の傳説を披き、聖道淨土の眞假を顯開して邪偽異執の外教を教誡すといひ、後序には、竊に以れば聖道の諸教は行證久しく廢れ、淨土の眞宗は證道今盛んなり、然るに諸寺の釋門教に昏くして眞假の門戸を知らず、洛都の儒林行に迷ふて邪正の道路を辨ふることなしとある、いよ／＼正眞の宗教とは念佛成佛是眞宗の教これである。

行卷に法照禪師の佛本行經に依りて作られたる讃を引用して曰く、

何者をか之を名けて正法と爲る、

第である、然れども眞假區別をなすときには假といふは即是聖道の諸機、淨土の定散の機也といふことになる、此時になれば禪律如何んぞ是れ正法ならんと喝破せられたる所以である、眞實の佛陀に歸命し、絶對の如來を信樂することを正眞の宗教である、是れ念佛成佛是眞宗といひ、念佛三昧是眞宗と仰せらる所以である、然るに彼禪律の如き性を見るといひ、心を了るといひ、自己便はち佛なりといふことになる、かくの如くんば歎異鈔に所謂煩惱を斷しなば即ち佛なり、佛の爲には五劫思惟の願其詮なくやましまさである。抑も彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。是れ實に道理によらば是眞宗なりと仰せられる點である、所謂如實修行相應である。しかるに、持戒坐禪を以て即身是佛といひ即心便ち佛なりといふ、實に不如實修行相應である、如來本願の道理に相應せぬ、救済のことはりに叶はぬ、實に五劫思惟の願何の所詮もなくなる、願徒然である力虚設である、此の如き禪律如何んぞ是れ正法ならん、是れ假門である、權假である、如何んが道理相應すべき、いかでか自然の淨土に入る

若し道理によらば是れ眞宗なり。

好惡今の時、須らく決擇すべし、

一一に子細に朦朧すること莫れ。

正法能く世間を超出す、

持戒坐禪を正法と名く、

念佛成佛は是れ眞宗なり。

佛言を取らざるをば外道と名く、

因果を撥無する見を空と爲す。

正法能く世間に超出す、

禪律如何んぞ是正法ならん、

念佛三昧是れ眞宗なり。

性を見、心を了るは、優はち是れ佛なり、

如何んが道理相應せざらん。

如何にも意味深長なるを覺ゆる文字である。況んや親鸞聖人が其の獨得の文點を施して、一層絶對の意義を發揮し給へるに於てをや、抑も正法と邪見との區別は即ち佛法と外道との分水嶺である、聖人が常に眞の言は偽に對し假に對する言也との給ひて、偽といふは六十二見九十五種の邪道是也と仰せらるゝ點是である。かくて一旦は持戒坐禪をば正法と名くる次

ことは出來よう、涅槃門とは名づけられぬ、眞如門とは言はれぬ、此辨立は實に聖人九十年の心血の進るところである。かくて前記の和讃もす／＼味ふことが出来る、曰く念佛成佛これ眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ。聖道權假の方便に、衆生ひさしくとまりて、諸有に流轉の身とぞなる、悲願の一乘歸命せよ、嗚呼南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。おほよそ聖教には眞實權假あひまじはり候なり、權をすて、實をとり、假をさしおきて眞をもちひること、聖人の御本意にて候へ、かまへて／＼聖教を見みだされたまふまじく候と歎異鈔にも涙を注ぎて示されてある、好惡今の時須らく、決擇すべし、一一仔細に朦朧すること莫れと仰せられた御思召是である。洵に五臺山上に念佛三昧を發得したまひし後善導法照禪師の名言なる哉。實に教行信證眞實方便の廢立は全く此好惡を決して、一々仔細に朦朧の點を明瞭ならしめて下されたのである、嗚呼念佛成佛は眞宗の一語を引き延ばしたのが、實に顯淨土眞實教行信證といふことになつたのである。南無阿彌陀佛。

眞俗二諦の交渉

近角常観

序言

今回この講習會へ召されまして數時間に亘りてお話をすることになりましたのは誠に光榮と存じます。題は眞俗二諦の交渉と云ふのでありますが、此の問題の意味は甚だ廣漠でありまして、信仰上の問題より人生上の總ての問題に及ぶのであります。區分けて申しますれば、國家と宗教との關係、信仰と道德との關係、專修と雜修との相違、進んでは信仰の上より佛恩報謝の念あるや否やの問題、又近頃世人の喧ましく云ひ出した眞宗に祈禱あるや否やの問題、その他宗門と政治との問題、宗門内の政治問題等無數の問題があります。之等の事柄に付ては自分の信仰の立ち場より多少考へても見ました、未だ秩序立つて組織的に話したことはありませぬ。又今日までに國家と宗教とか、三教會同等の問題に付て意見を發表し、また義論も致しましたが未だ取まとめて話したことはありませぬ。元來此の如き生きた問題は理窟や政策などで解決が出来ると思ふのが間違で、是非共信仰上の根本から解決せねばならぬ。だから以下に説く所は信仰問題から世諦經營の立場を明らかにせんとするのであります。即ち第一に信仰に入る筋道第二に其信仰から出て来る活動に付て申し述べたいと思ふ。解り安く云へば宗教生活に入らざる前の俗生活即ち迷の生活を翻へして眞實の信仰に入れば、その信仰は必ず又

俗世間に出て活動するものである。山に入れるものは山を出る如く、世間を捨て、證りに入れるものはその證を以て俗世間を救はねばならぬ。宗教の眞價は實に此處に存するのでありまして、此の味を深く翫味しなければ眞俗二諦關係は解らないのであります。それ故上に列記したやうな色々な問題は信仰の解決によりて自ら明らかになつてくるのであります。即ち徹底したる信仰を獲得するならば、必ず人生活躍の俗諦は來らねばならぬ。故に今日は直に信仰問題の根本に立ち入りて説て見る積りてあります。

一、人生問題と信仰問題

從來世人が眞俗二諦といふ名目を開くと、直に心に思ひ浮べる普通の考は、眞諦とは後生の一大事の問題で、未來佛に成ることであり、俗諦とは此の世に於て日暮しする道なりと範圍を二つ畫くのである。

眞諦

俗諦

此二諦の範圍といふ問題であります。

そうして眞諦門では——世人の誤り安いのには——云何なる

罪惡の人も佛の本願力によりて佛に成れる、極く弊害を著しく云へば、眞宗は眞諦門に立てば如何なる罪惡も許されて佛になれるのだと眞諦を決めてしまひ、俗諦門では此等の罪惡を犯してはならぬといふこと考へるのであります。

世人の總てと云ふてないが此くの如く言ひもし又此くの如く書く人々があるのである。之を明かに二者の間を全く没交渉にしてしまひ、惡しき事をして彌陀の願力に乗じて佛になれるが、然し善き事をして日暮らしせねばならぬと云ふ事になつて来る。かゝる事柄が眞面目に一人の人間に於て心中に不調和なくして行へるかどうか、語を換へて云へば眞俗二諦の範圍を分けられるか何うか。若し上の如く分けられるものとすれば、日常の行爲が即ち未來の問題に關係するものなれば、二者矛盾することとなる。往生淨土のためには罪惡でもよいが、俗諦道德の上では罪惡を犯してはならぬ。即ち眞諦では罪惡が許され俗諦では許されぬことであるから、一人の心の中に果してかゝる事柄が成立し得るであらうか何うか、又安心して行けるかどうか。今日信者の多くが信心の上では罪惡の者でも御助けと安心するが、俗諦門に於ては完全な日暮しが出来ないと云つて歎くのは無理からぬことであると思ふ。眞諦俗諦と言葉の上で分けてあれど、一人の人の心の上では其様に分かるものでない。俗な言ひ方であるが第一の眞諦門の關門では罪惡の者でも助けて下さると通りたれども、第二俗諦門の關門は通られぬといふことになる。苟も信心を頂たものなれば罪惡を犯してはならぬといふ、即二者の矛盾は明白な事實である。具體的に之れを云へば、俗諦の王法や倫

理から眞諦の信心を見れば非道德となり、非倫理的となり、非國家的となつて来る。又眞諦の信心から見れば國家は不平等となり、非宗教的となりて調和することが出来なくなる。蓋し是れ本來眞俗二諦に對する根本思想が誤れるがために、最初より矛盾するやうに不調和に考へられてあるのである。從來二諦の關係は舊き人達は眞諦門で罪を許し、俗諦でその罪を制限すると云ふ風になつて居る、是が根本の誤謬である。眞諦で罪惡を許すのではない、許すのではないけれども罪惡が止まぬものゆへ、其罪惡のものを見捨てぬのが御慈悲である。其御慈悲を頂くものなるゆへ、罪惡を懺悔しておのづから眞面目なる行動が出来るのが俗諦門である。罪惡を律法的に制限出来るものではない、然るに根本的に眞諦の信仰が眞實でなきものゆへ罪惡をしてもよいといふことに誤りてある。それでは世道と矛盾するものゆへに強て調和を試み遂に國家に媚び諂つて、調和して行く風に見受けられる。弊害の方から云へば、信仰は皆無にして、徒らに、殖産興業も盛んにせねばならぬ、社會事業も起さねばならぬなど、「朝家の御爲め國民のため念佛申し合はせたまひ候は、芽出度く候べし」と云ふ一語を楯に、國家の提灯を持つ傾きがある。これでは眞實の眞諦の信仰なくして、強て便宜的に世間に適合せんとするに過ぎない。又今日の青年の信仰を重んずる人の中には、宗教は根本的に國家と矛盾するものと考へ、信仰は倫理と反對するもの、様に考へるものがある。基督教の人の如きは屢此誤謬に陥りて、親を捨て君を離れて神に隨へと説くものがある。かくして全く俗諦を破壊して了ふことになる。

歎異鈔の「親鸞ハ父母ノ孝養ノタメトテ一遍ニテモ念佛マフシタルコトイマダサツラハズ」などを讀み、ナマナカに解釋して感心して居る人があるが、此處は最も大切な處でありませぬ。かゝる間違に墮するのは救済の意味が不明なからである。悪くてもよい、淺間しくてもよいと云ふのなれば救済の意味が全然矛盾してしまひます。こんな事は云何程説いても決して眞面目なる實行の力を與ふるものでない、即ち眞實の信仰でないから俗諦が出て來らぬのであります。

そこで茲に先づ第一に注意すべきは、二諦の範圍が未來の事と此世の事と分つべきではない。

眞諦
俗諦

一人の人間の上のことなれば、此處は眞諦、彼處は俗諦と分けることは出来るものでない。鳥の兩翼車の兩輪といふ譬喩がもと二諦一つであることを云ふたものなれど、何んとやら二つものがある様な誤解に陥らしむるのである。眞俗二諦なる名目は信仰した上で現はれて來るが、初めから分けてかゝるものではない。現に蓮如上人には此の御言葉はあるけれども、親鸞聖人には分離した御言葉はないではないか。兎に角歴史的に後に出來た名目を前に持て行くのは好くないことである。法然上人は念佛爲本、吾祖は信心爲本、蓮如上人は頼む一念と御説き遊されたるは、時代に應じて言葉が變つたのだと云ふことを知らずして、前の方へ引き戻し、法然上人の上に頼

のは浮びもせず沈みもしない道理と同じやうに、信仰も徹底しないものは此の世に於て活躍するものでない。此世離れて未來のことばかり云つて信仰だと云ふのは誤りて、人生全體が活躍せんければならぬのであります。されば親に對する孝行も、國家に對する愛國心も、必ず信仰から出て來ねばならぬので、信仰を離れては何事も無くなるのである。以上は二諦の關係を大體の筋道だけ説明したのであります。

一方宗學の方面から論じなければなりません。諸君の中には既に考へて居らるゝ方もありませう。法然上人は選擇集の選擇本願の下に念佛、是法藏比丘於二百一十億之中、所選擇之往生之行也と示して、總ての行を選擇捨て念佛の一行を選び取るが選擇本願の意味としてある。法然上人の時て云へば發菩提心とか戒律と云ふやうなもの、今日世間の道徳で云へば孝養父母と云ふ如きものをば選擇本願では悉く選り捨て、かゝる行の出來ないものゝために念佛を誓はれたと云ふ所に救済の意義が現はれてゐる。法然上人當時に發菩提心出來ない者が佛に成れると云ふとは、今日忠孝無くして行けると云ふのと同じで随分世人を驚かしたのである。併我等は道徳も國家も眞諦も俗諦も其外總て人間としての何事をも出來ない者である。其者を見捨てぬのが選擇本願念佛と云ふ意でありませぬ。私は之を信仰の上で味ふには久しく掛りました。が、信仰の上で味はなければ何の所詮もないと思ひます。法然上人が流罪に遇ひ、南都北嶺の迫害に遇ひながら、念佛は發菩提心の出來ない、孝養父母の出來ない、持戒持律の出來ないものがいたゞけるのが念佛なりと、飽まで專修念佛を

む一念と云ふ御言葉がないだとか、信心爲本の語が明かでないだとか云ひ出して、色々議論を重ね、無理にても三者間の相違を辯護仕様として居る如きは、愚の骨頂と云はねばなりませぬ。法然上人の時代では念佛爲本と云ふて他力の信仰が説かれ、蓮如上人の時には頼む一念と云つた方が他力信仰を説くに最も適切であつたのである。二諦論も前に持ち運んで論ずるのはこれと同一の誤りと申さねばならぬ。そこで救済の意味から明らかにせねばなりませぬが、救済は悪くても好ひ、淺間ましくても好ひ——世間には斯く説く人が多い——と云ふことではなくて、悪しき者を見捨てざるが救済の意義であります。此の悪しき者を見捨てざる大悲に依り、悪しき者が慈悲に満たされて大なる力を得、その上で色々の活動が出来るのである。眞諦と俗諦と分離して了つては意味はない。一人て云ふのなれば家庭のことも國家のことも皆一度は必ず眞諦を通らねばならぬ。我等は忠も出來ず孝も出來ぬ、全自己を擧げて罪惡の塊である。罪惡なるが故に悪くても好ひては俗諦が消える。此澤山な罪惡が大なる佛の恵みによりて救はるゝのである。即ち眞諦門に依りて救はれ、それが表はれて人生の萬事の上に働くのである。人生生活の上に於ける罪惡を佛の恵によりて見捨てられぬものゆへ、其佛の力によりて俗諦の上に光を持來すことになる。自己一生の總てが罪惡なれど、佛の恵みを得て甦へるのであるから、徹底した信仰は必ず世間的に出て來ることが出来る。眞に此世を捨てらるれば必ず又此世に光を認めることが出来る。恰も眞に水の底に達した物なれば必ず再び浮きあかるが如くて、中途に止つてゐるも

説いて下されたのが誠に有り難い。私の力では何事も出來ぬ孝養父母が出来るものではない、五逆十惡の惡人である。されど夫てもよいと云ふのでなく、その惡人の心をば飽まで見捨てぬ大悲大慈に出遇ふて見れば煩惱即菩提と速かにさとして下さるのである。煩惱菩提證無二と云ふことは、誠に意味の深いことである。法然上人はこれを示されたのである。選擇本願念師の意は全く是に外ならぬことである。信仰の力か行の上に現はれるのである。即其佛の力がいたゞけたのが正定聚不退の位に住するのである。正定聚不退の位とは單に信者を賞めた言葉でなく、眞實その位が得られて活躍出來るのである。だから信仰を道徳や國家に合ふやうにするのではなくて、信仰を得ることによりて、道徳も國家も更に一段の光彩を添へ、進歩の域に入るこゝとなるのであります。

二、信仰的實驗

前回申しました意味合ひを自分自身の問題として實驗したるところを御話して、了解して頂けば色々細かく喋る必要はないのであります。其前に人生上の總ての問題に就て廣く味はつて戴きたいと思ふのであります。

眞諦と俗諦とを範圍を區別し且救済の意義を取り違へるときは、未來の一大事に付ては云何程悪くても好ひが、此世にありて王法爲本を固く守らねばならぬと云ふことと誤解する。而して其弊害はこの俗諦がをろをかになる事より生ずるのである。信後の罪惡も許さると口に云はずとも、事實上許さるゝことゝなつて居る。うどんの食ひ逃げが世人の批難を蒙る

のが實は此點であります。此等は皆法體に流れて居るのである。又反對に自分が悪いと歎く人は能機に陥る人である。即佛は助けて下さるゝが自分は悪い者で致方ないと歎く人、後念相續が出来ぬと苦しむ者、御報謝が出来ぬと悲む者、其外信仰は頂きたるも家庭上の問題若くは實社會上の問題に困るといふ人等が多いのであります。此等は畢竟信仰が徹底しないからであります。是は安心上に就て云ふのであります。今日の思想界にも之に類した問題があるのである。廣く申しますれば佛教全體に亘りて論ずるとが出来ると思ふ。即ち人生を捨て、山に入れた者が、再び山を出る能はざるは徹底しないから、の事で、隱遁宗教の出来た所以であります。平安朝の佛教は眞宗の開闢によりて初めて山から出る事が出来た。恰も釋迦が出山せられたと同様である。今日の青年の思想上にも之に似通つたものがある。即ち如何なる罪惡を犯すも是も佛の恩寵であると言ふ事は、ツマリ悪くても好いと云ふのと同様であるから自然主義と同一である。こは人間の有の儘に任せよと云ふ自然主義である。而して之に正反對の思想が所謂トルストイの無抵抗主義である。飽迄人に對して善くせねばならぬと主張する非常な理想主義である。此自然主義と理想主義の二つが今日世間の思想界に在る事は、恰も安心上に如何に悪しくてもよいと云ふことと、俗諦を守らねばならぬと苦むとの二があると同様であります。此二の問題は何時までも一方に止りて居られるものでなくして、必ず他の問題を引起すものであります。即法に流れて横着と云ふて居るものでも、何事か起りて再び機に沈むものであります。即個人の上で考へ

るに信仰を實生活に活用しない間は、悪くても助けて下さるて樂に行くことが出来る。即ち佛を心に考へこしらへて満足して通るので、言はゞ主觀的満足若くは冥想的満足である。或は自分の心を清くし、佛の心を理想として其通り實行したいと云ふて勵み進む間は左程に矛盾も感せず、苦しみも少いのであります。然るに今現在實生活の問題に突當て大に煩悶に陥るのであります。從來同行信者の人達が未來の事は苦にならぬが、現實の生活が苦しいと訴へるのである。是れ悪くても未來御助けと安心して居るものでも、此世の實際問題に躓くのであります。是信仰其物が徹底しないからである。若し生きた信仰なれば一般世俗の事柄にも活躍するのであります。自分自身の事を云ふのは變ですが、實際の味を言はねば分からねゆへ、少し話します。即ち始め、私は自分の悪しきといふことは解らず、世間の道徳即ち俗諦を漸次實行仕様と勤めたのであります。然るに俗諦は限りなく高尚に進むもので、初めは單に人道を踏む位の考が、遂には身を粉にし骨を砕きても進行せねばならぬと云ふ風に登つて来る。果してかゝる事が出来るかと云ふになか／＼出来るものでない。具體的に申しますると私は宗教界を理想的にせんと思ひ立ち全身を擲らんと志したのであります。——俗諦の積りて——段々やつて行く間に自分が善いことをして居ると云ふ思ひが高まれば高まる程、思ふ通りに行かない事に突き當つて不満足を感じ、他人が自分の斯くまで努力し、善くして居ることを認めて呉れないと云ふ心が起り、遂には人を恨み、或は隔てなどして俗諦につまづいて來たのです。自分を犠牲にして敵を愛せんとし、

獻身的に宗教の爲めに盡さんとしたのですが、決して自分を捨て、居たのではありませぬ。言ひ換へれば心の中で立派に行ひ得たりと思へる俗諦は行はれなかつたのであります。世の信者がツマリ家庭の不圓滿な時の自分と、佛の前へ出て居る時の自分とは別々のものとなつて居るのである。斯る信仰は眞面目に考へぬと、獲たと思ふて居ても何時しか破壊せられて了ふ。寺院生活には殊に之が多いので、云何程佛の恵みと寺院生活の苦辛とを調和仕様と試みても、能ふものでない、此苦しみが即ち佛の恵みなど、力んでみても、畢竟氣休めて決して調和出来るものではないのである。此の問題に就ては信者の中に随分苦しんで居る人が多いやうですが、これは實際問題から出て来る苦しみにあります。茲に於て眞諦と俗諦と言葉は分れて居るけれども、俗諦は眞諦以外のものではないことが解つて来る。日常の日常に佛の恵みによらなければ安心出来ぬことが知れて来るのであります。世の多くの人が信仰問題は解決し得たりと思つた後で苦しみつゝある。人生上の問題は實は信仰に入るまでの問題であることに氣付かず、解決を人生に求むるのであります。現に私も人生に善くし得ない私の心を隔てず了解して呉れる友を求めたのであります。私が隔つるものを向ふからは隔てずに了解して呉れる友を求めて居ると、計らず其間へ信仰問題が飛び込んで來たのです。問題は極めて單純である。此場合同情者はなければならぬ。然しあると思ふてもそれは假定に過ぎない。かゝるものを御助けと主觀的に思ひ定めて居ても満足は出來な

てる我が心を隔てぬ眞の同情者が顯れて下さつたのであります。實に是が佛の御心であります。そこで初めて佛の廣大なる恵みを得たのであります。實に是が佛の御心であります。私が初めに宗教界を理想的に出来る、自分は熱心家であると思つた間は、我こそは戒も守れる、忠孝も出来ると思つて居たと同様であります。即ち自力の發菩提心が出来ると思つて居たのである、完全な道德家の積りて居たのである。それが人生問題にブテ當つた時に皆悉く折られて了つた。今日まで何事も出来る筈でないのに、出來た様に思ふて居たのは畢竟名譽心に驅られ、熱心家なりとの虚名をむさぼらんとして居た結果である事に氣付かなかつたのである。そうして善を爲しつゝあり功を奏しつゝありと、自らも思ひ人にも語つて居たのである。他人を敵であると思ひつゝ、敵を愛せんと思ふは甚だ間違で、やはり敵は敵として何處までも悪く、發菩提心も忠孝も戒も皆總て守れなくなつた。出來ないと云ふ事に氣づいたのであります。斯くの如く信仰問題と人生問題とは全く同一でありまして、選擇集の選擇本願の文が始めて了解出來たのである。安心上より云へば信者が我れは惡機なりと、自分で云何に悪い／＼と思ひ詰めても、決してそれは本物でなくて只自分が苦しむばかりである。其悪い／＼と自分の心を壓へる下には、どうかし善きものたらんとするから眞に頭が下つて居らぬ。此心には悪いのは自分許りてないと云ふ不面目な考や、一面は悪くても他面は善いと云ふ心はついて放れぬ。悪くても困ると思つると所へ悪くてもよいと云つた所が解る筈がない。信者が生死岸頭に立つて苦しむのは之であ

ります。九州の柏谷と云ふ人は俠客として非常に評判の高い人でありましたが、トトした事から信仰に近付き、自らは我慢は無いと思つてゐるがどうも苦しい事が多い、御慈悲の程は解るけれども、一家の者共に不平なしと云ふ譯には行かない、これは修養が足りないからしてやうかと云はれたが、通過した積りの眞諦が通過して居ないから俗諦は駄目である。悪心は止まずとも好いと云ふても満足は出来ない、止まざる者を憐む大慈大悲の御同情をいたゞきて初めて安心が出来る。それを悪くても好ひのだと云ふ風に思ふは甚だしき誤解で、その悪しき者を見捨て給はざる大悲が云何にも貴ひと思つた時能了速満足功德大寶海の意味が解る。悪いけれども佛様に助けて貰へる位の處では悪は元通りに存在し、到底満足は出来ない、從て俗諦は守れぬのであります。雜修十三失の中に佛恩を念報する念無しと云ふのがありますが、あれは心の中に佛の慈悲のとゞかぬ部分のあるのを、何とかして善く仕様と修養をクツ付けて居るから、報謝の心が出てくる餘地がない事を云ふので、自分の心で充分に満足な以上は世間へ出て活動することが出来ぬ。だから淨土宗の教義では信心已外に別に世間門をヒツ附けるより仕方がないのであるが、眞宗では之れに反して總て御慈悲にて満足せしめられて御報謝で世間へ出る事が出来る。選擇本願の謂は戒行のはげめない者を法藏菩薩が見そなはし、出来ない者を見捨てぬとある、本願なることを知つて魁へるのである。永劫の御修行は吾等の煩惱に對して一々憐んで下さる御慈悲である。如來の三光は衆生の三毒を消さんためて、戒行のはげめない者に凡てを満

が徹底しないからのことてあります。これが人生問題と信仰問題の大體であります。

三、信仰と道德

今回は前の續きとしまして、信仰より道德の出て来る事に就てお話しして見たいと思ひます。前回お話しした議論は人生上の諸問題から遂に信仰に入らねばならなくなると云ふことてありまして、殊に力を用ひたのは、佛の慈悲を頂くのは、人生の一部分に限らず、人生の凡ての部分に及ばねばならぬと云ふことてありました。昨日講演を終へました後で諸方面の方々に出遇ふて色々話をし、特に肝要であると感じました點は、未來に對する安住の心が今の生活を支配する日常の心の外にあつてはならぬと云ふことてあります。甚だしく云ふやうですが、皆さん御自身が人生上の諸問題に考へて居らるゝ中に、憂苦し、氣持ち悪く思ひ、或はこうでないのだと強て自分自身を誤魔化し、或は人間には出来ない事だなど、片附け居らるゝならば、その事を既に／＼早く見抜き、眞に同情を持ち、憐み呉るゝ一友人に出遇ふたならば非常に嬉しく感ぜらるゝに違ひない。吾々の罪の凡てを知り、それを救はんとして大慈悲を起し、その心をとゞけんと今迄弓を引きつめたる如く待受て居て下さる、佛のあることを知つて、實に難有い、人生に云何なる苦あるも此御慈悲に融かされ、人生は此恩恵によりて満たさるゝのであります。本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體无二と、すみやかにとくさとらしむ。誠に難有いことてあります。

足せしめ給ふが、萬行具足の南無阿彌陀佛であります。悪しき心が止まらざりし此心へ、佛の御慈悲が行きとゞいて下さるゝが故に満足があるのである。さればその時の自分は全く無善無戒である。此處を機法二種の深心と云ふのであります。古來機法二種の深心を機五分法五分といふ様に考へ、若し法七分機三分なれば法に傾くといひ法三分機七分なれば機に傾くといふ。夫故に法に傾くものには機を説き、機に傾くものには法を説きて、調和して誤を正すことが出来る人があります。甚だしき誤解であると思ふ。これでは信者は行きつ戻りつして安心することが出来ない。私は思ふに眞宗の信仰は機十分なれば、法も十分でなければならぬと思ふ。何うかと云ふに如來の本願は悪くても助ける法に非ず、悪しければ悪しき丈見捨てぬ深き御慈悲なれば、機の深きだけ法深く、法深きだけ機深きので、罪惡が深き爲五劫永劫の御苦勞が起りたのである。我等が罪惡のみ一人立ちするのでなく、罪重しと雖も石の如く庭中に横るのではない、罪重きが故に夫を引上げる如來の御助けがあるのである。此罪を自覺するのと御慈悲を自覺するのと同時である。然るを他人に恵みを求め、或は恨み、或は嫉みなどするは、佛の御恵みを得ないからの事で、例ひ世間的に善行をなすとも、御恵みを得ない間は中心から満足することが出来ぬ。それが自分が悪しき者なることを知りて、御慈悲に満足した上の活躍は即ち俗諦であつて、信仰に附け加へた俗諦ではないのである。此俗諦の中には世間の道德も活動も包容する事であるから、凡ての行動が秩序的に、道德的に、國家的に相對的にあらはるゝので、悪平等に出る如きは信仰

茲に一寸申さねばなりません。吾々の信仰の立場から云ふと、布教と云ふ事は如何にして他人に信仰を興へるか云ふ方になりませうけれども、自分の實験を本としなければ何の効もないことてあります。そこで悪くても佛になれるのだと悪しき心を笠に着るのでない、悪しき心だと先方より云ふて居て下さるを感じたる時に、悪くてもよいと云ふのでない、善くならんとしても駄目であると氣付くが即ち自發的の道德である。信仰にして道德に現はれ來なければその信仰は病的の信仰であります。我等が苦しむ點を眞に了解し、同情を寄せられたる時、充分の満足をして眞に感謝し、逆境に力を得、眞に人間が變るのであります。此信仰の力で今日の自然主義や危険思想を退治することは何でもないのである。此等の考はなやめる者を財産を以て救ふべしとか、外界の經營によりて満足を興ふべしと思へるなれど、人間そのものが不完全である以上到底望むべからざることである。人間が此處に突き當りて苦しみ、遂には地獄に墮つることを佛豫てしろしめして無蓋の大悲を下し給ふたのである。然るに從來佛の難有味はかゝるものを御助けと、此方より佛にあてがう方が多く、自ら慰め、誤魔化して行くのがあります。之れでは修養になつて了ふ。だから愈々となり佛は此方を飽迄も知て居て下さるのですかと、念を推さねばならぬ様になつて来る。此方からあてがつて居るのだから眞實に安心が浮ばぬので所謂不徹底な信仰なのであります。それが眞の恵を拜した時斯くも廣大なることがありしかと只仰ぎ信するより外ない。此状態になりたいと云ふ心を人に起さしむるは必要ですが、

先方より恵を受くべきを此方より計らふから苦みを根本から無くすることが出来ず、眞の信仰に入り難い。心の有様を盡きて我等の悪さをしらすされることは傳道上必要なことでありませぬ。勿論多少の弊はありますけれども兎に角、我等の悪しき點を指摘して、確に吾々の心の奥底までも知り抜き、無限の同情を以て苦悶を取り除て貰ふことが出来る。然るに十劫安心と稱して吾等は十劫の昔から光明に包まれて居る、攝取せられて居るのだと唱導するものがあるけれども、夫はかく思ふて許りて安心は出来るものでない。和讃に「十方微塵世界ノ念佛ノ衆生ヲミシナハシ、攝取シテヌテサレバ、阿彌陀ト名ツケタテマツル」と示し、歎異鈔には「彌陀ノ誓願不思議ニタスケラレマイラセテ往生ヲハトクルナリト信シテ念佛マウサントオモヒタツコ、ロノオコルトキスナハチ攝取不捨ノ利益ニアツケシメタマフナリ」とあれば、昔から攝取光明の中に居るのではない、難有いと氣付きたるとき攝取に預るのである。されば俗諦は茲に初めて發動して来る、然るを眞諦は眞諦で成立せしめ、俗諦を信心以外の道徳で行はんとするは駄目な話で、善くせねばならぬ」と如何にあせつても甲斐のないことであるが、その甲斐のない心を救ひ給ふと云ふことに氣付き、唯除五逆誹謗正法の意が明かになつて来る。逆悪が悪いと云ふても、逆悪でもよしと云ふても、救はれるものではない、是れ救済の意が不明なからであります。極樂へ行くと云ふ事は、地獄へ行く者の心の底へ彌陀の誠が到りといふた所で、極樂へ行く往生の業事成辨して助けて頂くのである。即ち救ふて下さると云ふ味ひが、今落ちるといふ人の心にと

なければ出来なかつた者が、愛することの出来ない者、人を敵視する者を見捨てずして愛して下さるのが佛の慈悲である、かく佛の慈悲に接して甦へるのである。幾ら愛仕様と努めて見ても結局駄目であつて、恰も囚人の何犯も重さねた者と同じく、悪いと知りつゝ犯して下ふ。

由來道徳を分ちて他律的と自律的との二にするが、他律的は「斯くせよ」とか「之れに従へ」と命ずるもので所謂律法主義であります。これは全く自力でありますから皆その不可能に苦しむのであるが、眞宗ではその不可能の者を見捨てざる恵に救はるのであります。だからするなと云はれても行はずに居られなくなるのである。抑々戒律の精神は佛涅槃の時、將來我が言を我と思へと仰せられたる如く、佛の言であるゆへ、之を行はずには居られぬ様になるのである。必ずしも斯くせねばならぬと云ふ他律的のものではない。従て五戒はなかくとも十戒はなかくとも佛の恵を胸にいたゞけば實行せずには居れぬ様になる。此意味に於て大經の五善五惡が眞宗俗諦の源と云ふて差支ない。大慈の御蔭によつてせねばならなくなるのである。改悔文の「モロ／＼ノ難行難修自力ノコ、コロカセラル、等」とは信仰に入れば厭やても現はれて来る自然の行でありまして、何も逆如上人が添へ物とせられたのではないのである。元來上人の書き方は凡て積極的で、「頼ミ申シテ候」と云ふことも、慈悲を知らずに今迄居たのが誠に相濟まなかつたと云ふ所を頼むと教へて下されたもので、如何に頼んだかと尋ねても分からぬ。乍去深き御慈悲で今迄の悪さ

いいて、かくまでも見捨てぬ慈悲が解るのであります。だから救済の意義は積極的でないねばならぬ、私の行へるは佛がなさしめたては佛の恵の感じが薄い、行ふ能はざるものが佛の恵によりて融かされた所が信仰なのである。家庭の人々に對して不足を感じ、如何にその心を壓へやうとしても出来なかつたが、御慈悲を頂てより人生上に於て頭が下り、氣樂な日暮しが出来るやうになりしと云ふは最も意味のある話で、如何に壓へても壓へることは爆發を免れぬ。法律で爲し能はざる所、其他殖産と云はず興業と云はず、その爲し能はざる所を憐み給ふが御慈悲であります。法律や教育でやれぬ所、説き得ない所を宗教家の任務に待つと云ふ聲は、近來屢々耳にする所であるが最もな話であります。大逆事件に關係し懺悔した人がありますが、此人は廣大な御恵を知りて今迄の思の間違を知りたのである。人生を覆ひ、總ての人生の上に蒙る信仰を貫はねばならぬ。この日常生活の問題は直ぐ未來の問題と連關してゐるのであります。それを一に分け、佛様に未來の事許りてなく、此世の事まで御心配をかけるは勿體ないと云ふ人は誤まつて居るのである。即ち救済の範圍を未來の事にのみ限つて居るので、其上に悪くてもよいでは救済の意味が明でない。此の如き信仰では世間門へ浮て出る事が出来ぬ。若し御慈悲に接し淺間しき心が解けた揚句は、全人格に行き渡りて了ふのである。即ち道徳的に敵を愛せんと勉むる時は、敵と云ふ觀念は退かぬけれども、信仰に入れば人を敵視したのが根本的に間違であつたと解つて来る。今迄仕様とつとめて見

が御慈悲の力で溶けて了ふのであります。だから心の内に少しでも何物か残つて居たら駄目である。唯御慈悲ばかりに満たさるゝのである。是が専修專念である。淨土宗で念佛を稱へその上戒律を守れと云ふことは、念佛を本體とし持戒持律を附加へる、故に難行難修となる。基督教も之に同ずる邊があります、何れも善くないことと思ふ。世間の道徳で云へば、忠孝をせねばならぬ事は皆知て居るけれども、出来ぬから困る、實際になると出来ぬと云つて苦しむのであります。如何に律法的に忠孝をせよと申しても、眞の道徳の起らぬ事は前に述べた通りであります。然らば云何にしてよきかと申しまするに試みに聖徳太子の十七憲法に初めに人生問題より信仰に入り、又信仰から人生の諸問題に力を得ることは明らかに伺ひ得るのであります。聖徳太子の一世は今の眞宗の風と全く同じであると思ふ。法然上人が例ひ死罪に處せられさせても念佛の止む筈がないと仰せられたは寧ろ信仰の力である。元祖吾祖の流罪は却て念佛を盛んならしめた事は、如何に信仰の力が偉大で、人生問題に及ぼす影響の甚だしきものかを示すのである。基督教と淨土宗とは信仰の律法的たる點に於て一致する。而して、共に斯くせねばならぬが、やれぬと云ふ所で行き詰つて了ふ。歎異鈔に「父母孝養のためとて念佛一返にてもまうしたることいふださふらはす」とある如く、孝養を仕様としても出来ず、祈禱せんとするもその力なきが故に、祈禱仕様と力む必要もない。然し悪るいなりて好いと云ふのである。此逆悪なる者を廣大な慈悲によりて見捨て、下さらぬのである。夫故祈禱一つ出来ぬ私に現世利益を下さるのであ

る。然るに我は祈禱しないと意張るは甚だしき間違である。出来ないのである。また出来ないと悲むのも間違ひである。祈らずとも護りて下さるのである。和讃に『山家の傳教大師は、國土人民をあはれみて、七難消滅の誦文には、南無阿彌陀佛をとまふべし』とありて、信仰の力はかく迄廣大の力である。即信仰から道徳に及ぶ意味合ひが容易に解る。同時に信仰の命ずるところなれば何事も行はざるべからずと云ふ力が入つて居る。然らば佛様の行ひでも出来るかと云ふにそれはいけな。方角が違ふ。今迄佛の様に出来る様に思ふたが誤りである。寧ろ何事も出来ぬものを佛様が見捨て、下さらぬのである。そこで自ら折れて自ら頭が下り、俗諦の道徳となるのである。木に竹をヒツ附けた様に、信仰にヒツ附けた道徳では決してない、御慈悲に難修を加へるは不完全な信仰なので、信仰の力を以つて世を指導し得らるゝは全く此處に胚胎する。古の宗教家て其實例を示して居る人達は随分多いのである。だから宗教家は人世百般の業務の根本精神を指導するもので、此正しき道によりて立つて貰はねばならぬ事、若し信仰の力が人生にあらはれずして世捨て人になるなれば、未だ此正道に立たない人と云はなければならぬ。獨り宗教家許りてなく何れの方面の人にも此徹底した信仰が必要なことでありませぬ。此信仰を起さずして如何程施設を改良し、法律を改正しても徒らに律法的に壓迫するのみにして犯罪續出し、五人殺し十人殺しは其跡を絶たないのである。法律は外に現はれた行爲の上の事と云ひ乍ら、心の底から此如き犯罪を起す心を御慈悲の力によりて溶かして仕舞はぬば、決して犯罪を止め

ることは出来ぬ。故に法律上の問題に宗教家が注意を拂つて貰ふことを望むと同時に、司法當局の人にも此徹底したる信仰を理解して貰ひ、御慈悲の力を以て悪犯罪、危険思想を根本的に溶かし去りて、國家を信仰の上に愈々強固ならしめんことを切望して止まぬのであります。

四、國家と宗教

今日は國家と宗教と云ふ題目のもとに其精神の大體を理解して頂きたいと思ひます。本題に入る前に信仰上の事に付て二三注意すべき點を申しますが、此間から話して居る眞俗二諦は其範圍を劃然と二分するものについて、弊害を一口に申しますと、信仰が徹底しないのは或は眞想的に流れ、或は實行的に陥ると云ふことであります。眞想的といふは自分の心で思ひて作るのであります。即佛様は助けて下さるのだと思ふのですから、思ひ許りに陥つて眞想的になる。之では未だ充分に御慈悲が到りといいたとは云はれませぬ。一書生が西有程山師に向て、我は天地と宇宙と一體だと思ふて居りますと云ふたれば、思ふて居る丈悪いと叱られた話がある。思ひ許りではまだ佛様を作りて居る。今日此種の人の多いのは歎くべきことであります。感情的に思ふのであるから聞者も説者も共に涙を流すけれども、醒めた後は何でもない。更に進んでは隱遁的に消極的になるに過ぎないのであります。次は實行的といふのは、佛様の事を理想とし、之れを實行して行かんとするのである。つまり自力になるのである。

由來多くの人は眞諦は眞想的となり、俗諦は實行的となる

のであります。これは自分で作り出した信仰で絶対他力の信仰とは申されませぬ。古の言葉で云へば定善散善とも申しませぬ。二善は本、我等が性質に二の種類がありての事であるが、夫故に我等にも此何れかの傾向のある事は注意すべき點で、青年にして光に攝して見たいと冥想に陥りて、佛前で眼をつぶりて考へて見るのは定善の機であります。又一方の性質は自分は不眞面目でいかぬ、行が悪い、どうかして矯正したいと力むことである。此即散善の機であります。此二種の状態に止つて居ては到底最後の光は見えないのであります。言葉は他力であるけれども心は決して他力ではない。トルストイが無抵抗を飽造實行せんとして最後は自殺に終らなければならぬ。然らば云何にして絶対の救済に入るかと云ふに、眞想的にも駄目となり、實行的にも駄目となり、どうする事も出来なくなつて初めて解つて来るのであります。淨土宗の西山流は、初から佛様に助けられて居るんだと思ふのですから眞想的的であります。佛の光明に攝取せられた者が、眞面目がやぶれて來出し、腹立つて來る等の事はあるけれども、大低の人は信仰の未徹底を目覺せずして終はつて了ふ。法に流れる人は兎角信仰の不十分に氣の付き悪くいものであります。又實行的の方は進むに従て理想が高くなるから遂には倒れて了ふ。今日の青年には必ず之があります。眞面目であるけれども光を得ることは出来ませぬ。悪いとは申しませぬが、それは信仰が假設的のものであると云ふことに氣付かねばならぬ。腹を立てた時、佛の事を想出して、なて下して腹癒やしをせねば眠れないといふのは假設的の信仰である。然るに其立腹する心

中を豫て知召しめして下さる御慈悲を頂くなり、其儘に眠ることが出来るやうになる。だから實行の出来ない事を實行せんとして居た假設的の信仰であつたと氣がつけば、かくの如き實行出来ない私を飽造見捨て、下さらぬ御慈悲を頂くばかりであります。何うして頂くのかと云ふ人がありますが、頂く方法があれば自力になります。そんな方法はありません。厭やでも自分々々の實感に訴へんければならぬ。斯ういふ信仰でありますから一面から云へば私が實に不完全なもので、いつまでも我こそは傳道してよいと思ふ事は一生ありますまい。然しかゝる不完全の者が御慈悲を頂て見れば此通り満足出來ると云ふ邊にて始めて傳道が出来るのである。法然上人が散善を御授の時、順彼佛願故の五文字を御喜び遊ばされたのは、我等が戒律禪定の出來得ざるを察して、其者に稱へさせんとすの彌陀の本願に信順するなりと仰せられたのである。敢て諸行は出來ないでもないが南無阿彌陀佛を稱へよとあるから稱へるのじやと云ふ意になると律法的に本願に従順服の意味となります。西鎮はそれでありませぬ。吾祖は何れの行も及難き其者をしらしめしての救済と御喜び遊ばされたから、信順と解釋せられたのであります。他の行が出来るならば選擇本願の必要は無い、道心もなく菩提心もなき憍慢の惡凡夫なるが故に、其者の爲とて選擇したまひたが南無阿彌陀佛である。だから歎異抄にある如く『地獄は一定すみかぞかし』と仰せらるゝのである。しかるに其者を見捨てぬのが五劫思想の御苦勞じや、そこで『五劫思惟の願をよくく案んずれば偏に親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にて

ありけるを助けんと思ほしめしたちける本願のかたじけなさと夜が明けて来る。此とは吾祖と元祖とを比較對論して見るといよ／＼明白になるやうに思ふ。元祖は云はゞ消極的であつて、孝養父母其の他一切の行を選び捨て、偏に善導に依りて、南無阿彌陀佛の「法のみ往生の業なり」とし玉ふた。吾祖も行卷に此義を明に示されてありますが、全體に亘りて考へて見ると萬事が非常に積極的である。法然聖人は念佛には發菩提を擇びてたと仰せらるゝに、親鸞聖人は「淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、すなはち願作佛心を、度衆生心となつたり」と信心か即菩提心と宣ふ。此の如く一切の事柄が信仰の上に發現し、一切經は彌陀の本願海の有様と見玉ふたのである。共に内心の經驗に基いたもので、我等の信仰の歷程も此規範を脱せぬことと思ふ。道德其他の何事も出来ない」と云ふ消極ばかりでは大變である。未徹底の信仰が悲觀思想若くは消極思想危險思想に接近するのは此點であつて、此狀態より甦へるに非ずんば信仰の價値はないのであります。何事も行へぬ者が御見捨なき廣大な恵によりて生きるのであるから、信仰の命する儘に行動するので、信仰以外には何物をも認めることは出来ないのである。昨日仁保博士の講演中に、知盡きて信仰に入ると云ふお話がありました。結果は同一であるに拘らず、その立場が私と全く異つて居るのである。即ち博士は知と信とを別々に考へて居らるゝ。又宗教は平等的のものであり、國家は差別的のものである。だから其本質に於て既に衝突を免れぬと假定し、日本の佛教はその差別性を加味して來て居るものと云はれました。が然しこれは徹底

した信仰を解しないことから起る議論であつて、眞の信仰は必ず差別的に表はるゝのである。罪惡觀は獨り眞宗に於てのみ起る。何んとなれば我等が行はんとする力なく、何れの行も及ばぬと云ふ時、其行へぬものを見捨てぬ長々の御苦勞を頂きたる時眞の罪惡觀がある。其罪惡を自覺して御恩を仰ぐ故に、此處に差別相が出るのであります。惡平等危險思想に陥るのは、所謂冥想的の信仰、若くは實行的の信仰でありまして、眞の信仰はどうしても秩序的差別的に現はるゝ。若し現はれなければ似而非信仰と申さねばなりません。てありますから眞に眞諦門に體達せられた人でありましたれば必ず俗諦門に出ることが出来ます。聖徳太子の十七憲法を拜讀して見ますと「一に曰く、和を以て貴しと爲し、忤ふなきを宗と爲す、人皆黨あり、亦達する者少し。是を以て或は君父に順せず、乍ら隣里に違ふ、然れども上和けば下睦し、事を論ずるに諧ふときは則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん。二に曰く、篤く三寶を敬せよ、三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり、何れの世何人か是の法を貴まざらん、人尤も惡なるは鮮し、能く教うれば之に従ふ、三寶に歸せざれば何を以てか狂を直さん。三に曰く、詔を承ては必ず謹め、君をばれ之天に則り臣をばれ之地に則る、天覆ひ地載す、四時順行し萬氣通ずるを得る、地の天を覆はんと欲するときは壤を致すのみ、是を以て君の言は臣承り、上行へば下效ふ、故に詔を承ては必ず慎しめ、謹まざれば自ら敗る」等と第一條の人生問題によりて第二條の信仰を得ることによりて道德が現はれ、人生の諸問題に解決がつき、國家が成立して第三條

の如く君臣の上には歴然と差別相を見るのであります。宗教は平等で國家は差別のものなりと、兩者の間に鴻溝を劃するときは、國家と宗教とは根本的に矛盾衝突を豫想することになる。然るに宗教の眞意義は分立を許さず、必ず眞の平等には必ず炳然と差別相を眺めることが出来るものである。だから信仰に映する國家は必ず正道を人生に實現するもので、決して不眞面目なものではないのである。然し此の國家は差別、宗教は平等と全く相分つ考は獨り學者ばかりでなく、基督敎の如き宗教家にも随分多く見る所の説である。即ち宗教は非國家的のものである、出世間的のものであるが、その結果はどうしても兩者の矛盾を來たさねばならなくなる。然らざる時は宗教家が拵けて時勢の必要上世間に順應し、若くは諛つて殖産興業の提灯持ちをせねばならぬ羽目に陥るのであります。此考よりしますれば『朝家の御爲め國民のため御念佛申し合はせ候はゞ芽出度候べし』との御教へも便宜上述べられた御言葉か、左もなげねば念佛迫害に對する辯護としか見ることが出来ぬのであります。然るに此御消息には深き意味があります。即念佛に對する迫害は屢々でありましたが、苟も眞の信仰者はたとひ他人が念佛を誹り惡む者ありても夫を惡むべからず、佛智不思議を疑ふ者に對して十九、二十の願を設けて之を見捨て給はぬ如く、たとひ如何に念佛を防げる人に對しても、云何にもして自然の利益に依り佛の心がとゞけたしとの思召から、念佛を停止せられたれば世に僻事の起らぬ様に『朝家の御爲め國民のため念佛申し合はせ候はゞ芽出度候べし』の御言葉が出て居るのであります。法然上人が迫害

に遇ふても、此念佛に怨をなすものは天地神祇護る法なれば必ず冥衆の冥眈を蒙るであろう、之をあはれに思ふと仰せられたことは、どうかして佛の恵が傳へたいとの意を含むもので、引いては此誠意を盡すことが國家に忠なる所以と見給ふたので、吾祖の俗諦と全く合致することである。世人が監獄敎誨に道德的か宗教的かとの議論ありて、念佛とか信心とか宗教的言語を用ゐれば宗教的と考へ、道德上の言語なれば倫理的と思ふものがあるが大なる誤である。眞の徹底した信仰の見地より話すときは、たとひ道德的の言語を用ゐても宗教的である。たとへば一粒の米を粗末にした時殺生戒を犯したもので、やたと云はれて胸にこたえる如く、形は道德的の言語であつても其内容は宗教の眞髓である。此の如く云何程倫理を談して居ても信仰上より話せばその儘宗教であると云ふ事に氣付いたのであります。要は信仰に徹底すると云ふことであつて、徹底さへすれば國家、社會、家庭等の俗諦門上の問題もなく解決がつくと云ふことを申して此講演を終はる次第であります。(大谷派本山布教講習會にて)



告白

眞の同情者

清水かつ子

かゝること書き得る身にもあらねど、先生の仰せに従ひ我が入信の道行きを御話し致します。私は以前永がの間主人の勧めにより、常に法縁には遇はせて戴きましたが、たゞそれは主人への義理づくでありまして、少しも佛の御慈悲を有り難く感じたことはなかつたのであります。然るに明けまして一昨年四月頃、常に御懇意に致して居ります加藤さんの所で、生沼菊子さんに初めて御目にかゝつたことがありましたが、そのとき生沼さんの如何にも美はしい信仰に御入りになつて居るのを見まして、羨ましくもあり、また耻しくも感じたのであります。

もとより女の心狭く、殊に煩悶や苦悶の絶えぬ身でありましたので、どうしたら此の苦しい胸のうちが楽になるであらうと、常にやるせなかつたのでありましたが、まへの生沼さんの御様子を見ましてより、宗教に依りたい氣も一層強くなりました。その胸中のたえられぬ煩悶を近角先生に聞いて戴きましたのは、去年の四月十二日のことでありました。

然るに先生はそれは皆あなたの業なれば、致し方なし、されど佛はかゝる罪や業の深いものをそのまゝ御助下さるなれば、その限りなき御慈悲を御喜びあれと、懇ごろに御さとし

情に同情して下さい、尙その上私の家へも態々御越下さいまして、主人及び私へ懇々と御さとし下さいましたが、それは十一月十一日のことでありました。

さてその時先生が私に仰せ下さるには、その事情は兎も角今一度法に流れては下さいませぬかとのことでありました。ところがその時私は、その御深切な御言葉を全く如來の御言葉であると、實に難有く感じさせて戴きまして、これ迄如來以外に同情者を求めたるは、全く我が誤りにて、如來こそ眞の同情者であつたと、只有り難く感じさせて貰ひまして、これ迄は悪いとは口に云ひながらも自分の悪さは少しも省みず、主人の信仰が本物でないとか云ふやうな、人様計りに悪さを着せて居つたのは實に濟まなかつたと、しみじみ自分の誤りを懺悔さして戴くやうになりましたので御座ります。

それから十二月九日に、一寸鎌倉までまいりまして、生沼さんを御見舞申して、色々御法の話をして戴きました。が、その時々その美はしい信仰を慕ひ、その信仰から流れ出づる佛のやうな御言葉に感心して居ります私は、またこの日その御口より次のやうなことを聞かして貰ひまして、深くその言葉を難有く感じさせて戴きましたので御座ります。その御言葉とは『あなたのことは御察しますが、然しこの世の間で最も大切な、最もあなたに近い方の信仰がまだ足りないならば、それを眞の佛の慈悲のもとに導くは、一生涯のあなたの仕事である、何事もそのためにせねばならぬ』との意味でありましたが、私はその御言葉が身にしみて深く感ぜられまして、今後愈々このお耻しい心に鞭うちて、如來廣大の

下さいましたので、大に自分の悪るかつたことを懺悔し、それより半月計りは人生に何一つ不足なく、只々廣大な御慈悲を感謝して過ごさせて戴きました。

ところが一時非常に難有く感じた心も、段々日のたつにつれ薄くなつて行きましたとき、また家庭上で押さへられぬ苦痛を胸中に感ぜねばならぬことが起りまして、それと共に會て自分が喜び且感謝して居たころは、もとのやうに自分を慰めて呉れぬやうになりましたので、私はまた先生にこの苦しい胸の中を聞いて戴きたらうてならなくなつたのであります。

ところがお耻かしいことには既に四月十二日に、先生の前ですべてを佛に御任かせたと云ふたその口のまだ乾かぬに、どうしてもそれは出来ぬと云ふやうな我慢心も起つて来るやうになりましたし、またこれ迄は自分の苦しい胸の中を、遇ふ人毎に訴へて自分の心を慰めて居つたのですが、四月十二日以後はその人々にも自分の胸の中は綺麗になつたやうな顔をしていたのでありますから、今更苦しいといふて同情を求むる譯にも行きませず、一層寄席か芝居でも行つて氣を紛ざらそうと思ひましたが、それも主人に對して出来ませず、心のやり場がないやうになりましたのであります。

それで遂に十月二十八日に、これ迄煩悶の大原因でありました所の家庭問題に、断然たる解決をつけようと思ふてそのことを云ひ出したのでしたが、矢張またそうゆかぬ事情となりましたので、とうとうまた近角先生を御尋して、四月以來の苦しい胸の中を御話し致しましたら、先生も非常にその事

御慈悲を喜ばして戴こうと思つてあります。

かくて私の現在の胸の中は、何一つ不足と思ふことも御座りませず、佛に對し、主人に對し、世間に對し、只感謝あるばかりで御座ります。

一我等は實に仕て見やう無き者である。此の故に佛此者を哀れみ給ひて、遣る涙無き救済がましますのである。爾るに我等之を頂く一念、やゝもすれば仕て見やう無き者が仕て見やうを得た心持ちになり、其の永劫仕て見やう無き處が、如來大悲の根源たる事を忘るゝに至り易い。是れ常に世の信仰者の陥り易き間違である。茲に於てか「我等は不具者である」との御さとしに、一際優れて有難味を覺ゆるのである。既に不具者であれば、如何なる事ありても、再び不具者がよくなる事は無い。此の永劫仕て見やう無き我等が有様を頂く上に於て、此の不具者の嘘えを一きわ有難く感ずる事である。

一今日青年者の或人は曰く、「我等は深く求むるも、人の如く輕率に信ずるか好まず」と。一應至言に似たれども、斯くして佛を信ぜざるの申譯無き事なるを思つて居らぬのである。斯くして自己の智を加へ、之に腰をおろして、大に自己は眞地目によつて居る積りて居るのである。凡てお慈悲の事は、やるなら思ひ切り、やれば我儘の折る、時機あるも、中途に自己の智を難へ低御すれば、ちがつかね。殊に信仰の問題が、内心の實際問題を離れ、思想問題となり、口先ばかりとなつて居る方面の人は、大に警戒を要する事である。

生存競争の世に眞の同情者を得たり

橋本 芳雄

不思議な御縁で、突然御慈悲を戴かして貰つた私、先生の仰せに従つて、唯有の儘を書かして戴きます。

私は、常陸の一寒村に生れた者であります。開山聖人との御關係も深いので、本来ならば眞宗の御教も大分弘まつて居る可き筈でありますのに、如何なる譯か、私の地方では、一向に信仰など云ふことは振つて居りません。念佛は老人の仕事、坊主は死人の世話をする者としか思つて居りません。従つて私は、小さい時より、御説教を聞いた事も少く、御經の何たるかも知らない、謂はゞ家庭的の教へと云ふものは、全く缺けて居ると云つても好いのであります。

一體私の家は、片田舎の些やかな農家でありまして、勿論中學校などに入る餘裕は無いのであります。其れにも拘はらず、父母は我が請を入れて、苦しい中から學費を拵へ、中學校へ入れて下さいました。私は初めの中は前途に大いなる希望を抱いて、喜んで勉強して居りました。然るに三四年頃になりまして、だん／＼卒業後の事など考へ出されたのであります。友達は卒業後皆進んで高等の學校に入り、社會に出て大いに活動せんとする道が開けて居るのに、自分は連も専門學校へ進む譯には行かない。噫つまらない、友達が羨しい、何故もつと良い境遇に生れなかつたのかと、人を羨み身の不

會に出席しまして、先生より歎異鈔の講義を聞きましたが、未だ眞實に有り難さは解りませんでした。そこで私は此の苦しい胸を紛らはさうと思つて、成る可く人生問題、信仰問題には觸れぬやうに努めました。是は皆空な努力でありました。

昨年九月、先帝陛下の御大葬を目前に拜し、又乃木將軍の忠烈なる殉死を聞いた時には、云ふに云はれぬ一種の感に打たれて、心の淋しさは益加はる許りでありました。常てさへ人に物を思はする秋は、私の心を愈悲哀に沈めました。噫、誰か吾が心を眞に知つてくれる人は無いか、心から同情して慰籍を與へてくれる人は無いかと、唯それ許り考へて居りました。或晩の事でした、皎々と照り渡る月の下に、私は同室の友二人と、廣い運動場の中を逍遙ひ、或は尾花の陰に座して、いろ／＼と物語つたのであります。其の時友達は、何れも両親が満足して居らぬ事を嘆じました、二親とも健全で居られる自分は、此を聞いて、非常に幸福に感じ、満足であるべき筈であるのに、我心は矢張り不安に堪へなかつたのであります。そしてその時、友達唱つた『山路越えて獨り行くけど、主の手に絶れる身は安けし』と云ふ讚美歌が、深く我心に響いたのであります。

其の後拓殖博覽會を見に参りました。我帝國が、明治年間に遂げた諸種の發展を見ては、衷心の喜を禁ずる事は出来ませんでした。然しこれと同時に、生存競争と云ふ事が痛切に胸に浮びました。我々日本人には、是等の發展は眞に嬉しい

遇を嘆きました。生れつき氣の弱い臆病な性分の私は、茲に於いて大いに悲觀し初め、染々と心中の淋しさを感じたのであります。所が誠に不思議な御縁で、卒業後、偶然にも眞宗に御熱心な某氏の御世話になつて、高等學校へ出して戴くことになりました。是も皆阿彌陀様の御引合せと、只管感謝に堪へぬ次第であります。此處に参りましてから、朝な夕な御文章を拜聴し、又折々近角先生の御法話を承りました。けれど甚濟まぬ話ではあります。何れも唯義理一片に聞くと云ふの外、別に深く心に留むることもありませんでした。高等學校へ入りました初めの間は、日頃の望が遂げた嬉しさに、夢中になつて暮したのであります。然るにだんだん時が経つに従つて、又々物事に不足を感じ、不平を抱くやうになりました。心の底には寂寞悲哀の芽が萌え出したのであります。所が一昨年一月、中學の先生からの熱心な勧めがありましたので、宗活老師のもとに參禪を致しました。て苦心の結果幸ひにも見性を致しました。此の時は實に悦ばしく感じました。然し心中にはまだ幾分物足りない淋しい所が潜んで居つて、一所に參禪した友達の様悦ばせません。是は自分の心が弱いからだ、強ひて安心して居りました。けれども淋しい心悲しい心は、折に觸れて現はれ出まして、如何しても抑へつけることは出来ません。斯くて心は益々苦しくなる許り、友達の熱心なクリスチャンであり、或は深く佛に歸依して居る人を見ますると、羨しくて堪えられず、迷信であれ、何であれ、信念の有る人は幸福である、自分も早く信念を得たい、信仰を得たいと心に痛切に感じたのであります。て數回徳風

かと氣付いた時には、實に慄然としたのであります。殊に狭い小屋の中に入れられて、他の動物と同じく、公衆の觀覽に供されて居る臺灣人や、アイヌ人を見たときには、誠に情無い感じが起りました。私は此時思ひました。何所を見ても生存競争ならぬは無い、實に恐ろしい次第である、然し是は皆他人の事と高見の見物をして居る譯にはいけません。自分が世の中に立つて、大いなる活動をせやうとするには、是非他人を押し退け、他人に打ち勝つて行かねばならぬ。生存競争の勝利者とならねばならぬ。而も一方より考ふれば、自分は何處迄も人に害を與へてはならぬ。否出來るだけ愛し親切を盡さねばならぬ。一方に好からんとすれば、他の方に盲く行かぬ、世の中はかくも矛盾であらうか、衝突であらうか。噫誰か此の疑問に解決を與へてくれる人は無いだらうかと、此の疑は深く胸に入りました。歸るとすぐ、親しい友に此問を出しました所、友は答へて曰く、「人生は戦争だ、愚圖々々して居ると劣敗者になる、大いに奮闘せよやらん」と勵ましてくれましたが、而し是は、私の疑問を釋くには未だ充分ではありませんでした。

忘れもせぬ十月八日の晩でありました。事情あつて、同室の友達が一時解散せねばならぬ事となりましたので、其の送別の茶話會を寢室に開きました。永い間寢食を共にした友達が、一時でも分離すると云ふ考が胸にあるので、何時もの様に、賑やかに愉快に騒ぐことは出来ません。話は進むに従つてだん／＼と眞面目になり、乃木大將の死を論じて、新舊道徳の論に入り、遂に宗教の話に移りました。その中に、一人

のクリスチャンの家庭に育ち、クリスチャンとしての教育を受けて居る友達が、種々と理論的に論じました揚句、「自分は神の存在を認め、これを信じて居る、しかし、吾等の如く、二十世紀の教育を受け、科學の何物たるかを解して居る人間には、在來の人々の如く、絶對的、盲從的に神を信じて行く事は出來ない」と論じました。私は此の時、此れは、神様を歸納的に認めて居るのだ。神様を自分で理論的に拵へて居るのだ。神様を信じて居るのは無くて、理論を信じて居るのだとの考が起り、我が佛は決してかゝる理論の結果ではない、絶對なものである、我々が理窟を以て、彼此申す可きではないとの信念の閃が、電の如く我胸を襲ひました。そして、自分の是迄佛様に對する考は、全く此の理窟一點張りて、此の眼前に自分を待つて居て下さる阿彌陀様と、そして其の廣大な御慈悲とに氣付かず、永の間御苦勞を懸けた、誠に濟まなかつた、自分が悪かつたと、衷心から懺悔の心が起り、それと同時に御慈悲に接せる大いなる歡喜とが胸に溢れに溢れました。これは皆、平常深く心にも留めなかつた、朝夕の御文書や、先生の御法話の御蔭であると、唯有り難さに堪へませんでした。すると實に不思議にも、此の全世界は金色の光に照り輝き、我身の周圍には光輝燦爛たる光雲が漲り、我身は丁度夢から覺めた如く、或は別世界にでも入つた如く、其の有様は實に何と申してよいか、申し様もありませんでした。私は殆ど夢か幻かの判斷も就かぬ位でありましたが、嬉しさを難さに、涙は止め度もなく降つたのであります。實に此の時の事は、何と申してよいやら、逆も私の筆では寫すこ

とは出來ません。實に之は午後十一時半頃の事でありました。會終つて後、床に就きましても廣大なる御慈悲を思つては、眠らうとしても、如何しても眠れませんでした。歡喜の爲に、一夜一睡もせずに明かしました。かくて今迄、私が人を疑ひ、人を羨み、物事に不満を抱いて居つた事の如何に悪かつたかと云ふ事を思へば、實に懼然たらざるを得ません。此の御慈悲に接して後は、心は安けく、身は喜びに充ちて居ります。其の後先生の御話を承り、御指導を仰ぐにつけても、愈御恩の深大な事が解り、只南無阿彌陀佛と唱へる外はありません。其の後、物事につけ煩惱の雲が起つて、光を隠して御慈悲を喜べぬ様の事がありますれば、先生の教へらるゝ通り、歎異鈔の第九章を思ひ起して、只管廣大な御慈悲に感謝して居る次第であります。(壹月十二日)

●昨年 陛下御登遐の際、某師が懺悔の一節に
「自分は今迄位記を頂かんと欲すれば、頂き得る位置あるに係はらず宗教家に位記は入らぬなどと、横着に考へて居たは申譯無き極みであつた。向ふより照るるものを、貰はぬなど力みて居つたは、自己に善き事が出来るやうに思つて居たからにて、親の御心配を無にして居たのである、今度御崩御に遇ひ奉り、今迄の申譯なきが一時に分り、言の出づる所が無い云々。」

自から理想的に考ふる者にとりては、大に味ふ可き言である。

講義

教行信證信卷二二信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

第四席

「至心釋」(法然聖人と親鸞聖人)

前席は私がお慈悲に氣づかせて貰ふに至つた経験をお話したのであります。處て此のお慈悲に氣づかせて貰ふといふ事が、實に六かしいので、既に前席でも申したが如く、今迄説教を聞きつけて居らるゝ方は、筋道の上より法門を聞かされ、聞いて／＼聞き開いて、漸くに氣が附くといふ、氣のつきやうである。又青年の方や、實際人生に活動して居らるゝ人達は、此の法門を聞き開くといふよりも、此の人生の實際問題に突き當り、夫れより御縁に入らるゝといふ方が多いのであります。處て此の二者、實は同じ事でありながら、夫れを一つに頂くといふ事が、實に難いのである。設へば前席でお話した事でも、青年の方や、世間の實際問題にたづさはつて居らるゝ人、又説教を聞きつけて居らるゝ方でも、一家なり、知り合ひ間の日常生活の實際問題で心を痛めて居らるゝ方に向ひては、必ず皆様の心の中に、何處か當つたふしが有らう

と思はれるのである。處が平素「佛の本願は斯うである」「頂き心地は斯くてある」と、斯ういふ風に法門の上より聞いて居らるゝ人から見たら、恰もかけ離れた世間話のやうに、いつもと違つて聞えたであらうと思ふのであります。處が此の二つが別々にならぬやうに、能く氣をつけて聞かなくてはならぬのである。青年の人や、世間の實際問題に當つて居らるゝ方などは、人生方面を主にしてお慈悲を喜ばれ、南無阿彌陀佛といふ事も、此の人生方面に就けては充分喜ばるゝのであるも、阿彌陀佛の五劫思惟の御本願といふ事、佛が不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じて御苦勞をなした下されたといふ事が、何うも充分受取り難い、といふ風になるのであるし、又今迄説教を聞きつけて居らるゝ人達は、今更法藏菩薩の本願を疑ふて無けれども、いつもお慈悲の事が唯其の事となり、我々の日常生活の淺間しき胸の中へ、直接夫れを頂くといふ事が、何うも輕いといふ風になるのである。故に茲兩者が別々にならぬやうに、能く氣を就けて頂かねばならぬのであります。一昨日の席にてどなたか、眞俗二諦に就きて聞かれたも實に茲の味ひにて、實に斯くの如き廣大のお慈悲なれば、眞に此のお慈悲を頂けば、何うしても日常生活の俗諦門の上に、夫れが現はれて來なくてはならぬのである。眞諦門の如來のお慈悲は、即ち我々が俗諦の日常生活の淺間しき行為の上に現はれて下さるお慈悲なれば、何うしても茲は日常生活の實際問題の上に頂かせて貰ふ處が、無くてはならぬのであります。

そこで私にしましては、前席申すが如く、何故お慈悲の事は幼より充分承知しながらも、夫れが彌々となる迄眞實に頂け無つたのであるか。即ち今いふ自分が實際人生の問題に突き當つて居ながらも、人生の實際問題と、お慈悲といふ事と、別々のやうに思つて居たからであります。處が夫れが前席言ふ如く、彌々の最後に於て、私の此の淺間しき根性の上に、佛のお慈悲一つで安心させて貰つたのであります。殊に前席の話で肝腎なるは、既に前席にも申した如く、私が此の人生に行き詰つて、自分が悪いと苦しんだのが、決して機深信では無い。併し私がお慈悲に氣づかせて貰つたのは、私が夫れ程迄に悪い、其の悪い私の根性の底の底迄知り抜き下されて、夫れが可哀相であるとお見捨て無き廣大のお慈悲に遇ひ、茲で有難うと一邊に頂けたのである。茲で一邊に私の悪い奴が、遣る瀬無きお慈悲の前に、悪うムりましたと、頭が下つたのであります。前席は主として私が此の實人生の上になつて筋道を話したのであります。其の苦になつた私が、此のお待ち兼ねのお慈悲を知らせて貰うなり、「此の廣大のお慈悲これ一つであつた、此の廣大のお慈悲を外にして、何うして安心が出来るものか」と、又「今日迄人が悪いとばかり言つて居たのであるが、然う言ふ自分も悪いて無いか。人が隔てると言つて居る自分が、隔て心が止まなかつたては無いか」と、此の私の悪い心を知り抜き、お見捨て無き廣大のお慈悲に遇ひ、有難やと頂いた時は、「今迄長々親様をお待たせして、自分の淺間しき心より、色々不足を言つて居つたは、實に申譯なき事であつた」と、親様に頭が下ると同

時に、人生を不足に思ひ、人を悪しく思ふ根性の根が切れて仕舞つたのであります。茲にお慈悲の徹到して下され一念には、何うしても、人を不足に思ひ、人を悪しく思ふ根性の根が切れ、おぼて仕舞はなければならぬ處があるのである。茲は思ひ切り申さなくてはならぬのであります。

三

全體今迄法を聽いて居らるゝ人の中には、動もすると「我々此の悪い根性の止まぬのが凡夫だから、此の悪い心の儘で往生させて頂くのである。悪い根性の者が、悪いと知らせて貰つたのが有難いのである」と言ふ人がある。我々悪い者が、悪いと知れさへすればよいといふ丈けては、佛の遣る瀬無きお心を頂いたといふ處が無い。夫れは成る程煩惱故、我々の悪い根性はいつ迄も有ることはある。親鸞聖人も『正信偈』の中には、

貧愛慎憎の雲霧 常に眞實信心の天に覆へり。
と仰せられた。なれども其の次ぎの

譬へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明にして闇み無きが如し。
の、此の闇みの取れた思ひが無くてはならぬであります。我々此の悪い者を眞にお見捨て無き廣大のお慈悲と承はり、「佛のお慈悲の遣る瀬無き、能くも此の淺間しき私を、夫れ程迄に呆れも爲給はて」と頂く一念「夫れ程迄に長々御心配かけたので有つたか」と夜が明けて見れば、此のお見捨て無きお慈悲に有らずしては、人生に安心の仕て見やうは無つたのである。爾るを今迄人に善くせよと、人に突きつけて居

たは、佛のお力をそつちのけにして、人に持つて行つて居たものである。人が善く仕て呉れぬから、佛のお慈悲が現はれて下されたのでは無い。全體人が善くして呉れぬと、人に求めて居た自分が悪い。人を當てにし「もつと善く、隔てぬやうに」など、人に持つて行き、求めて居た自分が間違つて居たのである。然う言ふ自分が人に對し、其の通り出來て居たか。夫れを人にばかり言つて居たは、全く自分が悪い、人が悪いのでは無い」とお慈悲に氣の就く一念には、斯く人が悪いと思ふ心が無くなり、人を不足に思ふ事が無くなつて仕舞ふのである。して人が無理を言はうとも、設ひいやだと思つても、根本に人を當てにする氣が無くなる故、人を憎む心が起ら無い。又生死問題にしても、「亡くなつた親を助け度い、死ぬだ小供について行き度い」など、離れられぬは私を哀れみ下さる佛を捨て、人間を懼まへて居るからである。成る程人を當てにするて無い、世の中を當てにするて無い。今迄人、人と言つて居つたが大間違ひで有つた。言うてる自分の事を差し置いて、人の事言つて居つたは、實に申譯が無つた」と、我が身の悪しさが知らせて貰へるのである。猶ほ茲でも一つ言ふと、今迄人が悪いと言つて居たは、人が悪いのでは無つた、自分が隔て、居たのであつた。自分が隔たてたは、實に此の廣大のお慈悲を頂かざりし故、とお慈悲に氣が就くなり、人を不足に思ふことが無くなつて仕舞うのであります。

四

猶ほ又斯ういふ事がある。殊に御婦人の方などは、人に不

足も有らうが、夫れよりも「人に善くせなければならぬ、姑舅に善く事へ無ければならぬ、隣人や親戚に善く仕て行かねばならぬ」の思ひが必ずある事と思ひます。それで此等の人が我が身の悪しさに氣がつくと「之てはならぬ、もつと善くしなければならぬ」と、更に一層心を努むるに至るのである。此の思ひが心にある中は、またお慈悲に氣がついたと言はれぬのであります。成る程之れでは我が身の悪しさに氣がついたのではあるも、また何んとかすれば善くなれるといふ氣が遣つて居る。否な善くなれども、せんければならぬと思つて居る。此の心のある中は、また我が身の悪しさに、眞に頭が下つて居らぬのであります。處が我々は夫れが出來ぬ。出來ぬ所がお慈悲の來て下さるも、となのである。汝等には夫れが出來ぬ、出來ぬ事を佛は先き知つて、汝等に夫れが出來ぬが爲めに長々苦勞したのでと言つて下さるのである。故に汝等、出來ぬ事を仕やうとするて無い。親は汝の出來ぬ事を先き知つて、夫れだから此のやうに心配して居るので無いか。佛かねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば云云。」其の出來ぬ事を初めより知つたればこそ、其の者を見捨てぬ本願を建てたので無いか。然るに其の出來ぬ事を自分で仕やうと仕て居るのは、全體汝自分で佛になる根性で居るのか。自分で佛になれるなら、自分でなつた方がよい。——『歎異鈔』には、

おぼよそ惡業煩惱を斷じつくりしてのち、本願を信ぜんのみぞ願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなばすなはち佛なり。佛のためには五劫思惟の願、その詮な

くやまします。云云。

「善く爲なければならぬ」といふは、道德的にはまことに感心なるも、また眞の落ち心地が頂けて居ぬからであります。然るに佛は其の善く出来無き者が可哀相故、其の者の爲めに苦勞する我が此の親心を能く知れとの、御仰せである。之を頂くと、「成る程今迄此の私が善くせんならぬと思つて居たは、大なる間違ひであつた。如何にも今迄は甲にも善くする、乙にも善くすると、身の程忘れて高上りの申譯無き考を起して居たものである。爾るに此の廣大のお慈悲頂けば、實に此の世の中に助け無く、善く出来ざる私の身なれども、實に此の廣大の親心ましませばこそである」と、「之から善く仕やう」との考が全く無くなつた時が、眞にお慈悲の頂けた時であります。で昨日の席でも或方が「善くせんならぬに出来ぬのは、自分の修養が足らぬからだ」と言はれたも、我々修養が足り無いから善く出来無いのでは無い。鐵は如何程叩いても金にはならぬのである。我々如何程努めたつて、善くなられやう善無き私の身なのである。然るに、其の私が哀れてであると、お見捨無き廣大のお慈悲を承るなり、「能くも」此の仕て見やう無き私を、夫れ程迄に、有難や」と、我々修養で善くなられるのでは無い。炭團の中まで眞黒き其の儘で、一點火がつくなり、全體に火がついて下され、我々此の仕て見やう無き者の心に、全體にお慈悲が入り充ちて下さるのであります。で此のお慈悲の俗諺に顯はれ下さる味ひは、人を彼れ是れ相手にして居る間は、眞諦門より顯はる、俗諦門の味ひにはなつて居ぬのである。人に求める心の無くなりぬ間は、本もの

になつて居ぬのである。此の遣る瀬無き御親切の下に、「さて自分斯る仕て見やう無き者であつた」と眞に我が心に見限りがつく時初めて、「善くせなければならぬ」の思ひが無くなり、南無阿彌陀佛々々と喜ばせて頂く事が出来るのであります。

五

さて前席來は主として人生問題より話したのであります。猶ほ御本願の上より話す事が多いのであります。で之よりは再び本願の筋合ひの上より、お話する事とする。夫れには先づ法然聖人の『選擇集』の御教化より話す事と致します。話が漸次に小かくなりましても、此の淨土門の教えに於て、法然聖人の御教化と、親鸞聖人の御教化とが一致して頂く事が難いのであります。第一斯く言ふ私が、眞宗の書籍を讀む上に於て、何うも長いこと法然聖人の示され方と、親鸞聖人の示し方とが、違ふといふ氣が仕て仕やうが無つた。で親鸞聖人は法然聖人の御教化をうけられたと言ひつゝも、「法然聖人は念佛主義である、親鸞聖人は信心主義である、法然聖人は一代如法にお喜びなされたのであるも、親鸞聖人は肉食妻帯をなされ、何うも其の興趣が違ふといふ考が腹の底に在るもの故、一つだ」と言ひつゝも、區別が在るといふ思ひが、長い間抜けて仕やうが無つた。夫れは、一步露骨に言ふと、親鸞聖人を徹底なされたものだとする、法然聖人にはまだ自力の遺り物がある如く見ゆるのであるし、又法然聖人を他力の正意だとすると、親鸞聖人には何處と無く淺間しき所が在る如く思はれて仕やうが無いのである。同じ他

力故區別が無いと思ひつゝも、私共眞宗に居てさへ然ら思ふ位な故、淨土宗の方にすれば、淨土宗に於ては親鸞聖人の事を排師自立と貶する位な故、茲の所の落着きに充分ならぬ處があるも、實に無理からぬ處が有ると思ふ事でありませぬ。

先づ親鸞聖人御一代の書き物を拜見しても、親鸞聖人の書き物では、普通に居る少しをかしいと思ふやうな所が、殊に肝腎な點になつて居る事が多いのであります。御存知の如く善導大師が至誠心を釋せられた處のお言葉に、普通に讀みて外に賢善精進の相を現じて、内に虚假を懐くことを得され。といふお言葉がある。外に賢善精進の姿を表するも、内に汚き心を持つて居るの故、内に汚きものを持ちながら外に殊勝相な風するも、うそである、偽りであるぞ」との御言葉であります。處が親鸞聖人は之を讀み方を替へさせられて外に賢善精進の相を現ずることを得され、内に虚假を懐くはなり。

「第一外に賢善精進の相を現ずる事を止めて仕舞へ。何れ丈けやつても虚假不實の塊りにして、内から善く成れる者では無いぞ。其善くなれぬ淺間しき者が、何て助るのであるか。夫れだからこそ見捨てられぬの、廣大のお慈悲一つで助かるのである」と、お讀み下されたのである。之が何んであるか。當り前は善導大師が示し下された如く、外に賢善精進の相を現じて、内に虚假を懐くことを得され」と讀むが當り前なのであります。夫れを親鸞聖人が斯く讀み換へさせられてあるは何故であるか。親鸞聖人は廣大のお慈悲を、あなたのお頂きなされたる頂き心地より、直きく示し下されたから

であります。で親鸞聖人の御教化は、いつても一應讀みて「をかしい」と思つた處が、屹度意味の深い所なのである。而して今のは唯一例に出したのでは無く、前席來お話する處の至心釋のお示しが、即ち之なのである。中に汚れた心を隠して表に善い顔をするな、内にはきたなきものが一杯あるぞ、其の惡しき者を見捨て給はぬお慈悲がましますと、其の者が安心させて頂けるのであるぞ」と、お示し下されたが、至心釋のお意なのであります。

六

そこで今の法然聖人と親鸞聖人との關係も、茲で能く分る故、分りよく言はうと思ひます。夫れは私の常に言ふ彼の手續りの着物の設へを言ふと能く分る、之を申せば、前席來お話した事が、更にはつきりすると思ふ故、之を申さうと思ふ事でありませぬ。

こは度々申す事なれども、法然聖人が念佛を御すゝめ下された故、念佛の元祖法然聖人と申奉る事である。處で念佛の元祖法然聖人と言ふことは、法然聖人が日本に於て唯念佛をお勧め下された故、念佛の元祖と申し奉るのでは無い。夫れならば日本に於て、永觀律師を始め、念佛をお稱へ下された方は、法然聖人以前に數多くある。必ずしも法然聖人が念佛の元祖では無い。然るに法然聖人を念佛の元祖と迄申奉るは、法然聖人の念佛は專修念佛といふことであつたからである。專修念佛といふ事は、法然聖人より始められたからであります。法然聖人の念佛は、實に專修念佛である、専ら南無阿彌陀佛々々と念佛するのである。之が法然聖人の念佛の特徴

である。而して此の専修念佛の爲めに、法然聖人も親鸞聖人も流罪にお遇ひ下されたのであります。先づ一應順序を言ふと、法然聖人は御存知の如く、九歳の時親御が仇の爲めに斬られて亡くなり給ひ、十五歳御登山以來有りとある道を求めて御修行をなされ、四十三歳の御時迄、一切經を六邊迄讀まれたのであるけれども、何うしても安心が出来ぬ。最後に四十三の御時黒谷の報恩藏に於て、善導大師の『散善義』をお讀みなされた時、次の一句に當りて、此の淨土門の基をお聞き下されたのであります。其の御文は

一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に。

「一心専念彌陀名號」——茲の處が實に肝腎であります。一心に専ら彌陀佛の名號を念じて、他に心を懸けぬのである。彌陀佛の外に猶ほ心を寄するならば、「一心に専ら」では無い。「一心に専ら彌陀佛を念ずるのである。専ら故雜りもの無く念佛をするのである。而して斯く「一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざる者」——即ち「つもく南無彌陀佛々々々」と念佛を喜んで捨てざるもの、是を往生淨土の「正定の業と名く」と。して次に「彼の佛の願に順ずるが故に」——此の「順彼佛願故」の五文字が大切であります。法然聖人は自ら此の「順彼佛願故」の五文字を見て、一心數證の時淨土門の基を開いたと仰せられてある。「彼の佛の願に順ずるが故に」とは、其の一心に専ら彌陀の名號を念ずるは、此方よりすがり求め、自分で力みて一

も、一寸假りに申します。抑々全體宗教とは何であるか、といふに佛なる方が人生に超越して在つても夫れは宗教では無い。宗教とは此の罪業深重煩惱熾盛の人生と、總て人生以上の尊い「さとり」の佛境界との間に連絡が着く處が宗教である。絶對の佛境界と、此の凡夫の我々との間に連絡が着きて、凡夫が其の佛境界に行ける處が宗教である。佛法とは即ち之れが佛教なのであります。て單に佛の「さとり」の境界丈け有りても宗教には成らぬ。眞如一實の佛境界ばかり有りても宗教では無いのである。金持と貧乏人とがありて、金持が何時迄も金持の儘で居るのは貧乏人の爲めには何もならぬ。貧乏人が金持になれる連絡がつく處で初めて宗教なのである。金持ちが金が有るばかりで、貧乏人との間に連絡が着か無くては、宗教にはならぬのである。其處で若し此方が其の貧乏でやつて行つて自分の努力で金持になれるならば、之も一つの宗教である。我々が凡夫の境界より、三僧祇百大劫の長の修行を経て、佛の「さとり」の岸上へ上るならば、是れも確に一の宗教である。之が聖道門自力の教である。是れ處が今淨土門は、我々が夫れで行けるなら一通りであるけれども、如何せん我々は其の自力の道では行けぬ。其の行けぬ者を岸上なる佛の境界より見て下された時は何うであるか。脚下に今水中に溺れんとして居る我々の有様を、岸上より見て下された時に、佛のお意は何うであるか。貧乏な者、難儀して居る者、苦しんで居る者を見て慈悲が無さならば「さとり」の人では無い。既に「さとり」の佛でましますからは、其の苦しんで居る者、迷ふて居る者程、夫れが可愛相て仕やう

心に専らにするあらず。余行余善は爲てならぬと、此方より力みて一心にするのでは無い、彌陀佛の本願に、一心に専らと仰せられてあるのである。彌陀佛の本願を見て見ると、十方衆生戒を持つとも仰せられて無ければ、行を爲よとも仰せられ無い。唯

若し我佛を成らん、十方の衆生成が名號を稱して、下十聲に至らん。若し生れずば、正覺を取らず。

とあるのみである。法然聖人の眼を著けられたは、實に茲なのであります。唯念佛を爲よと丈けならば、即ち先きにも言ふ如く、法然聖人以前の他師にもある。が夫れでは戒を仕てもよい、行を修してもよい、余行余善を仕てもよいが、先づ念佛を稱へよと言ふ事になる。處が法然聖人の唯一心に専ら念佛と言はれたのである。唯一心に専らとは、即ち佛の本願に、唯一心に専らと誓はせられてあるからである。十方の衆生罪人も、惡人も唯南無彌陀佛ばかりと、仰せられてあるからである。夫れだから「彼の佛の願に順ずるが故に」である。「歎異鈔」の二章に、法然聖人が「たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべし」と仰せられたたゞは、他に猶ほするならば「たゞては無い。我々五逆十惡の者が、たゞ念佛ばかり故、たゞ」なのである。「選擇集」の法然聖人の唯専ら念佛の御教化は實に茲から出て來たのであります。

七

そこでちと緻密になるも、叮嚀に聞いて頂かうと思ひます。先づ青年の方に彌陀佛の本願から分つて貰はねばならぬから、青年の方に分りよいやうに、之は言うて善く無いなれど

が無く、其處で其の岸上より一條の繩を下して「さあ来い」と言つて下されたが、即ち淨土門他力なのであります。で「善き事すれば佛に成る」「戒行坐禪をする時は佛に成れる」と言ふは、そは下より上に向ふ時の話である。今船が難破して、多くの者が海中に沈んだ。中で一人丈怒濤を凌いで向ふの島に泳ぎつくは、即ち自力である。先達つてタイタニク號が沈没した時は、力の強き男の方より先き助けられたか。到底助かる見込の無い婦人子供の方より初めた如く、今岸下に惱んで居る我々衆生を不懲と岸上より繩を下された時は、即ち善人なほもて往生をとく、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはく、惡人をは往生す、いかにいはんや善人をやと。この條一旦そのいれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。『歎異鈔』

である。「惡人すら助る、如何に泥んや善人をや」と言ふは、自分で善い事して行く普通の場合の事である。今岸上より繩をお下し下されたは、今生命のされる者、何程言はれても惡心の止まぬ者、其の者程よけ可哀相て見て居られぬとの思召である。抑々宗教上彌陀佛の本願は、之を外にして無いのであります。

八

さて今岸上の境とは、眞如一實の佛の境界である。海とは我々凡夫の迷海の事でありませぬ。處て我々到底自分で岸上に至れる道が無い故、斯く上より一條の繩が下されてある。處が岸の上の眞如一實の境界は、我々岸の下に居る者に分りやう等は無いのである。其の分からぬ者を岸上より御覽下さる

時、可哀相て仕て見やう無く、一如法界の都より、態々法藏菩薩と名のりを揚げ、其の者を救はんと顯はれ下されたが、阿彌陀佛の本願の繩などあります。て我々には此の御本願以上の事は、分りやうが無いのである。夫れより先きの事が知れる位なら、此の御本願の來て下さる必要は無いのである。會つて私の親友西川理學士が亡くなられる時、私はお話した。佛の境界は何ういふ譯で御助け下さるのか、そんな事は何程考へたつて我々には分らぬのである。そんな事が分る程ならば、何もお助けを蒙らなくてもよいのでは無いか。我々に夫れが分からねばこそ茲に本願の繩をお下し下されてあるのである。我々此の仕て見やう無い時に、何かは知らず此の一條の繩が居て下さる事が有難いては無いか。我々は唯此の繩を頂けばよいのである」と申しした時に、御安心下されたのでありまた。て我々に夫れが分らねばこそ、茲に繩をお下し下されてあるのである。しかるに我々其の繩の源を知らうとするのは、實に大間違ひなのであります。であるから宗教の特色は、此の他力本願に於て、遺憾なく宗教の根本義が發揮せられたものである。何故かと言ふに、宗教の救ひといふ上より言ふ時は、實に斯く他力は救ひも救ひも、まるくのお救ひである、實に救ひの眞髓の發揮せられたものであります。金持が幾ら金を持つて居つても、唯夫れ丈けては救ひにはならぬ。金持が貧乏人の爲め、其の持ちて居る金銀財寶を、「さあ之を遣らう」と擧げて投げ出した處で、救ひである。『教行信證』教卷の初めには、

斯の經の大意は、彌陀誓ひを起發して、廣く法藏を開いて、
凡小を哀れみて、選んで功德の資を施すことを致す。云云。
而して其の阿彌陀佛のお與へ物は何かといふに、即ち他力本願の品物である、そこで我々、もう之れ以上の事を知らうとするのは、間違ひなのであります。

九

さて其のお與へ物の本願は何うであるか。其處が即ち先き言ふ一心專念であります。既に先きにも申すが如く、我々此方より岸上に上れるならば、上より繩をお下し下され無くともよいのである。が如何せん、上りては落ち、自力作善ては、自力かなはて流轉し來た身なのである。如何に沉んや底下の我々、水面上に浮びも出來ぬ我々の身の上である。修行戒律、下より上る法は幾らも有れども、我々には一つも出來ぬ。其の余の事は一つも出來ぬ者の爲めに、特に下ろして下された一條の繩が選擇本願なのである。選擇本願は、善きものを選び取り、惡しきものを選び捨て、下されたが、選擇本願である。諸佛淨土の中より、善きものを選び、惡しきものを捨て、お作り下されたる四十八願である。殊に其の四十八願の中で、其の佛の境界と、我々凡夫の迷ひとの間の連絡を着ぐる根本義の中の根本義が第十八の願である。此の凡夫の私其佛境界に往ける連絡を着けて下さるのが、此の第十八願である。故は第十八願は、實に佛教中の佛教、宗教中の宗教、選擇中の選擇である。故に『愚禿鈔』の中には、

本願一乘は頓極頓速圓融圓滿の教なれば、絶對不二の教、一實眞如の道なりと知る應し。專中の專なり、頓中の頓なり、眞中の眞なり、圓中の圓なり。一乘一實は大誓願海な

と、斯く親鸞聖人のお示し下さるは、茲をお知らせ下されたのであります。

十

さて以上斯く言ひ置いて、其の第十八の選擇本願は何うであるか。何ういふ具合に選擇攝取して下されたのであるか。叮嚀に申します。先づ諸佛淨土の中には、或は戒を持ちて往く淨土もあり、又諸種の行を以て往生する佛土もある。斯く諸佛の淨土には色々ある。さて斯く色々あるが、今阿彌陀佛が十方衆生を助けて下さる爲めには、戒を以て往生の行と爲て下さる時には、我々下々の衆生の中には戒を持てる者は少く、戒を持てぬ者は多く、助からぬ者が出來て來る。故に戒では駄目であると先づ戒を捨て、仕舞はれた。之が抑々法然聖人が流罪にお遇なされるもとなのであります。何故かといふに、抑々戒は釋尊涅槃に入り給はんとする時、阿難が「此の後に何を以て佛とせんや」と問ひ奉つた時、釋尊が「我が滅後は波羅提木叉を以て我と思へ」と仰せられた程の戒にて、此の戒を持たぬ者は、佛弟子と言はれぬ程の大切なる戒である。夫れをば法然聖人は『選擇集』に於て、

若し持戒持律を以て本願と爲さば、破戒無戒の人は定めて往生の望みを絶さん。然る持戒の者は少く破戒の者は甚だ多し。

故に茲て阿彌陀佛は持戒を捨て、仕舞はれたとお知らせ下されたのである。實にひどいお示しである。法然聖人の御教化は斯くの如く實にひどい。法然聖人と聞くと、我々如法な優

しきお方と申して居るのであるけれども、『選擇集』の法然聖人は、斯くきびしくしてひどい法然聖人である。又爾らは發菩提心は言うと、其の菩提心も彌陀の本願には無いと捨ててお仕舞ひなされた。全體佛教の根源は、上求菩提下化衆生と、上菩提を求め下衆生を化益する處に在るので、此の菩提心が無ければ佛教では無いと、言つてよい程の菩提心である。其の菩提心をも斯くは無いと捨て、お仕舞ひなされたのである。であるから梅尾の明惠上人などは非常に腹を立て、「戒も無く菩提心も無きやうなもの、佛法で無」と、『推邪輪』といふ書を著して、ひどく法然聖人をやりつけられた。如何にも明惠上人より見れば、然うであつたらうと思はるゝ事でありませぬ。此の明惠上人といふ方は、深く釋尊をお慕ひなされ、親しく印度に渡りて佛蹟を仰ぎ度いが、渡れぬ故せめても此の波は、印度の岸を洗ふ處の波であるからとて、泉州堺の浦にて、海水に足を着け、遙に佛蹟を仰がれたといふ程の明惠上人である。又或時は懺悔の餘り、自身の鼻を刺りて求哀せられた事があり、今に其の血潮の掛つた不動尊像が遺つて居るといふ程の明惠上人である。其の明惠上人にすれば、戒を捨て菩提心を捨てるなどいふは、如何にもひどい事であつたに相違無い、と思はるゝ事である。又『選擇集』又のお言葉には、

若し智慧高才を以て本願と爲さば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧ある者は少く、愚癡なる者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と爲さば、少聞少見の輩は定めて往生の望みを絶たん。然るに多聞なる者は少

く、少聞の甚だ多し。…自余の諸行之れに准へて應に知るべし。

と、茲て學問も智慧も何もかも皆な捨て、お仕舞ひなされた。又親孝行も奉事師長も、末世の我々には親孝行も出来ぬと、親孝行も茲て捨て、お仕舞ひなされたのであります。此の時分の思ひにすると、親孝子が出来ぬやうな奴なら、人間ぢや無い。然るに其の人て無し其者の心を哀れみて夫れが捨てられぬとの慈悲故、即ち次きには、

當に知るべし、上の諸行等を以て本願と爲さば、往生を得る者はすくなく、往生せざる者は多からん。然らば則ち彌陀如來法藏比丘のむかし、平等の慈悲に催されて、普く一切を攝せんが爲めに、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲さず、唯稱名念佛の一行を以て、其の本願と爲たまへり。

と、實に手ひどい御教化であります。遂に南都北嶺の讒訴にお遇ひなされたのであります。去りながら法然聖人になると、讒訴に遇ふに違はぬも、之ればかりは周圍の事情などに關はつては居られぬ。何故ならば法然聖人にして見ると、四十三の御年迄、有らぬ道を尋ねて、遣りて遠り抜いて、何うして見ても安心が出来無つたのである。爾るに其の永劫安心のつく瀬の無い其者を助ける爲めに、唯念佛一つを選び取つたとある阿彌陀佛の選擇本願に廻り遇ひなされたのである。故にもう他のものなどに引いて居られぬ、即ち一心專念彌陀名號である。之れが自分で力みて専らにするに非ず、斯く如き仕て見やう無き罪業深重の私を救ふとある廣大の本願

願念佛故、彼の佛の願に順ずるの外無いと、なるのであります。

一〇

さて茲が肝腎である。彼の佛の願に順ずるとあるの故、唯念佛を稱へよとあるのだから、稱へるのであるとなると、之は命令的律法的に順ずるのである。然うては無い。他の行の出来ぬ其者が可哀相故、其の者の爲めに選擇攝取した南無阿彌陀佛の六字であるぞと、仰せ下さるのである。故に夫れを聞くなり、其の他の行の出来ぬ、戒行出来ず孝養の出来ぬ、五逆十惡の惡人とは、人ごとく無く此の私で有つた。此の私を助ける爲めに、選擇攝取して下された本願念佛であつたかと、順ずるのである、信順するのであります。他より爲よと言はるゝから爲るのならば信順では無い。斯くまでに大悲の心遣る瀬無く、此の他に仕て見やうの無き私の爲めに、此念佛の一行法を選択攝取して下された其の本願の親心のいたゞけて、「阿彌陀佛の本願念佛が、我々此の他の行の出来ぬ者の爲めに、居て下さるでは無いか。我々他に仕て見やうか無き者故、此の本願念佛にてまします」と信順するのである。「歎異鈔」の一章に

彌陀の誓願不思議に助けられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつ心のあこるときに攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。と信順するのであります。であるから親鸞聖人の示し下さる本願に、念佛の書いて無い本願は無い。親鸞聖人が本願を指示し下さる處には、必

ず念佛が先き書いてある。設へば聖人の御書き物を拜見しても信心の行者と仰せらるゝよりも、念佛の行者々々といふ事がよけ書かれてある。去りながら此の念佛が、念佛に力を入れての念佛に非ず、此の他に仕て見やう無き者に、其念佛一つを下されて、其の者を助けると仰せ下さる其のあなたの御親切を頂きての念佛である。故に「歎異鈔」の二章には

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。…

其の念佛一つで助くるとの仰せを蒙りて、夫を信ずる外に別の仔細無きなれば、即ち次には

…念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべららん、また地獄におつる業にてやはんべららん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかさされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。…

念佛は果して淨土に生るゝ種であるか、又地獄に墮つる業に於てあるか、夫れは此の親鸞には分らぬ。設へ法然聖人に欺かれて、此の念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔することはない。而して其の故はである。

そのゆへは自余の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはははこそ、すかさたてまつりてといふ後悔もさふらははは。いづれの行もあよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。茲である。之が親鸞聖人が法然聖人の選擇本願の御教化を受

けられた處である。何れの行も及びがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし。之が彌陀の本願を頂かれた處なのであります。彌陀佛は其の何れの行も及び難き者の爲めに、此の念佛を作つたのぢやと、仰せ下さる。夫れを法然聖人は念佛で示し下され、唯南無阿彌陀佛ぢやと知らせ下されたのである。私は長々不審で堪えなかつたは、「教行信證」に法然聖人の「選擇集」の肝腎の處が一向引いて無い。「行卷」に唯一ヶ所あるが、肝腎の「信卷」には何處に在るか、とながく思つて居つたが、前席來の至心釋が實に之れであつたのである。

「一切の群生海、無始より已來、乃至今日今時の時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虛假諂偽にして眞實の心無し。」とは、即ち善い事と言つては一つも出来ぬ、戒行も出来ぬ菩提心も起らぬ、不清淨不眞實の汝であるとの大悲の仰せてある。其の仰せを頂いて、實に如何なる事も一つも出来ぬ、觀念も出来ぬ座禪も出来ぬ、穢惡諂偽の私でござりますとお頂き下された處である。而して私の爲めに、南無阿彌陀佛の一つを成就してお與へ下さると言ふ處が次ぎの

『是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憐して、不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修一念一刹那も清淨ならざること無く、眞心ならざること無し。如來清淨の眞心を以て、圓融無碍不可思議不可稱不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。』

とある處である。斯く『選擇集』は明に茲の處に出てあるのてある。如來御廻向の品物を、頂いて喰べた味ひが茲なのである。故に次に、

『至心は則ち是れ至徳の尊號を其の體と爲るなり』
其の至心の慈悲は南無阿彌陀佛の尊號を以て其の體とする
と告示下されたのである。

さて茲で彌々手織りの譬へである。處て次席に詳しく言はうと思ひます故、今は唯要領丈け申します。之を聞いて頂ければ、上來申した處が能く分る。甚だ通俗なのでありますけれども、親が子供の爲めに着物をこさえる。絶對の佛の境界より、生死海に居る我々の爲めに、極樂に往ける衆生往生の行を定めて下さる、夫れを着物と喩えたのである。言ひ換へると佛が如何なる行で淨土に迎え取らんと考へ下さる、夫れを親が子供に如何なる着物を着せんと考へるに譬へるのであります。處て着物には綺麗なものもあり華奢なものもあり、「じみ」なものあれば質素なものもあり、木綿もあれば絹物もあり、色々ある。といふは、佛道修行には六度萬行がある。どの道でも遣れさへすれば必ず往けるのである。戒を持して佛になる道もあれば、行を修して往ける道もある。どの道でも此方が着れさへすれば、間に合ふのである。處が其の着る者の方を見なくてはならぬ。處が亂暴者の汗かきの私共には、華奢な着物では破れて仕舞ふ。即ち罪惡深重の我々は、戒の着物も破り、修行の着物も穢し、如何なる理想的の着物を仕立て下されても、私共の方で着る事出来ぬ我々なのである。そ

ず。身を投げ出して御苦勞下されたのである。而して此の御苦勞は、一に南無阿彌陀佛の着物を御成就下さる爲めの御苦勞に外ならぬのであります。

一一

そこで一寸話しが横道しますも、此の五劫兆載永劫の御苦勞は、阿彌陀佛丈けてあつて、他の佛には無いと思つて居るのは間違ひある。私は疾うから然う思つて居た。御存知の如く釋尊にチャータカ(本生譚)なるものがある。今日では皆んなが一個の設話の如く取扱つて居るのであります。あれは實に釋尊が過去世に於て私の爲めに御苦勞して下された、御苦勞の姿である。實に釋尊には、斯ういふ本生譚なるものがあるのである。夫れは其の書物を御覽になればすぐ分る。實に今日御同様に斯く一堂に集り、斯く尊き御法を聞く事を得るも、前に斯くの如き諸佛の御苦勞がましませばこそである。皆様が斯く諸種の御縁により集り下さるも、皆な一人々々の爲め御苦勞下されたであつたればこそであると、仰がせて貰ふ事でありませぬ。

猶ほ或る方は此の三四年前の『求道』に、此のチャータカを譯出して連載したのを見て信仰にお這入り下された方がある。夫れは釋尊が或る愚かなる比丘に、不淨觀をお知らせ下さるに、唯説いた丈けては何程説いても分らぬから、神を以て水中に一輪の蓮の花を咲かせ、其の凋落する有様を眼に見せて、諸法の愛着す可からざるを御知らせ下されたといふ話である。して其處の所に佛其の因縁を説かせられて、會つ

て夫等の間に合はぬ物は皆な親の方で選り捨て、仕舞はれて、さて何か着られる着物は無いか、何を着せたらよからうかと、遂に着せる着物が無くなつて仕舞うた。そこで親が最後にお思ひ下されたは、「もう手織りである、手織なら如何な亂暴な彼等でも破られぬ。もうこの一枚である、之を着せ度い」と、即ち阿彌陀佛が選擇攝取して、其の者に着せようと選り取つて下された南無阿彌陀佛の六字である。此の如何な着物でも間に合はぬ其の仕て見やう無い者を見捨てぬとの心より、長々御心配の結果、もう此の六字名號を與へようと、御分別のついたのが五劫の御思惟なのである。此の御勘考のついたのが、五劫の御思惟なのであります。處て考はついても、肝腎の着物が出来ぬば駄目である。そこで兆載永劫の御苦勞を爲し下されて、欲覺瞋覺害覺を起さず、欲想瞋想害想を記さず——即ち講本の今日の處の次の御文には、

是を以て大經に言く、欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず、色聲香味の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、少欲知足にして染患癡無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽誦曲の心有ること無し。和顔愛語にして意を先きにして承問す。勇猛精進にして志願倦むこと無し。専ら清白の法を求めて以て群生を惠利す。三寶を恭敬し、師長に奉事して、大莊嚴を以て衆行を具足して、諸の衆生をして功德成就せしむとのたまへり。

全く我々一人々々の爲め、永劫が間身心を捨て、欲の思ひを起さず、瞋りの思ひを起さず、害の思ひを起さず、色聲香味の法に着せず、常に和顔愛語と優しき心をもち偽らず誦して此の比丘は五百生の間、鍛冶と生れ、鈍金のみを眼をさらして居つたから、不淨の想を了解する事が出来ぬのであると、お説き下されたある處である。其の方は其處を見られて、あゝ佛は五百生の先きの先き迄知り抜かせられて、其の者に適切な一輪の蓮の花を與へて導き下された。我等の亦永劫以來煩惱惡業の深い者なる事を佛知り抜かせられて、其の私の爲め兆載永劫の御苦勞下されたある事に氣づかれて、信仰に入られたのであります。チャータカを見て信仰に入られたといふは實に有難い話である。

一二

さて今のは道寄りである。さて斯く親の長々の兆載永劫の御苦勞は、即ち其の手織りを織り上げ、南無阿彌陀佛々々と六字の着物を着させるやうにと、六字の着物を仕上げて下さる御苦勞である。して其の御苦勞の結果、其の本願成就して、正覺の阿彌陀と爲り給ふと同時に、今は其の六字の着物を御成就下されたのである。言ひ換へると其の仕て見やう無き亂暴者に着させる爲めに、親は態々手織りを作り、其の手織りは仕上つて、「さあ之を着よ」と、私共に與へて居て下さるのである。

さあそこで問題は、我々其の着物を有難うと着さへすればよいのである。そこで即ち法然聖人は、其の六字を着よと告示下されたのである。處て其の法然聖人の意は、此の六字は親の念力の籠りたる六字故、此を着よと仰せ下されたのである。處が、すると外の人は着る事ばかりに力を入れて、其の手織りを態々こさえて下された親の眞意を受く

る事に気がつかぬ。茲が實に法然聖人と親鸞聖人との違ひである。法然聖人は今言ふ如く、此の親の心の隨つてある手織りを着よとばかり示し下される處から、着る方が間違えて、唯着る事ばかりに骨折つて仕舞つて、其の親の遺る瀬無きお心を受ける事をせぬもの故、其處で即ち親鸞聖人は、

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願をまたぐる程の悪なきが故に。(歎異抄)

と、即ち親鸞聖人は選擇本願でも示し下されたのであります。全體親の手織りと親心とは、一つもの故離して言ふ事が出来ぬ。外の着物は間に合はぬ爲めに、其の者に態々手織りをこさえて下されたが、即ち親心なのである。然るに手織りは着ても、其の親心を着ぬといは駄目である。全體手織りを着るといふは、無名無實に身體に着るばかりでは無い、其の外の着物着れぬ者に之を着せ度いとある、涙ある親の眞意が有り難いと頂けた一念が、あゝ有り難い南無阿彌陀佛と着れた時なのである。其處で親鸞聖人は夫れを、其の親心を着よ、親心を頂けと申し下されたのであります。即ち『和讃』には、

彌陀の本願信ずべし、本願信ずるひのはみな攝取不捨の利益ゆゑ、無上覺をばさとるなり。

此の本願を信ずるとあるが、即ち親心を頂く事なのである。言ひ換へると、法然聖人が念佛せよと示し下されたは、即ち此の親の手織りを着よと知らせ下されたので、夫を親鸞聖人は分り易く、親の手織りを着よといふは、其の親の心を頂けとの事であると、お知らせ下されたのであります。夫れ故

子方は、唯南無阿彌陀佛を口に稱ふる事ばかり、即ち無茶苦茶に手織りを着る事ばかりに努めるやうになつた。即ち斯く言ふ私が、已前親の手織りを着ぬならぬと努めた處から、親の手織りを着て居ながら、猶ほ外の着物を着度いなど、思つた経験がある。之では眞に親心を頂いたものとは言へぬ。茲は次席に猶ほ叮嚀に言ふ積りでありませうけれども、其の時親は私に向つて何と言つて下さるか。汝我が手織りを着ながら外の着物が羨ましいなどと思つては、第一汝がまだ自分の性を知らぬからである。外の着物が汝に着れる位ならば、何も物好きに手織りの着物を作りはせぬ。汝は汗かきの亂暴者で、外の着物が着られぬ故、其の汝の着れる着物をこしらえんとて、我は長々苦勞して仕立て上げたのである。其の親の心を味はつて呉れずに、親がこさえて呉れたのであるからとて、義理に着て呉れたのでは何の所詮も無い。」と言つて下された時、茲で初めて親のお心が分り、「如何にも私が悪るかつた、今日迄は自分の悪しさを知らざりしもの故、夫程迄に御心の深き手織りとは知らなんだ。如何にも外の着物は着れぬ私でムりませう」即ち「何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかぞかし」

「實に汗かきの仕て見やう無き亂暴者でムります。今迄此の性を知らざりしもの故、他の着物を羨んだなどは、即ち餘行餘善に心を寄せたものであつた」と、雜行雜修は即ち之れなのである。此の地獄一定の亂暴者に着せたいとの親の眞實の塊りが、此の一枚の手織りの南無阿彌陀佛でましますのである。眞實といふは何が眞實かといふに即ち此の親の手織りが眞實、故に『至徳の尊號を其の體とす』といふは

親鸞聖人は、法然聖人の事を仰せらるゝ時、いつも念佛と言ふ可き處を、選擇本願と代へさせられてある。即ち『正信偈』では眞宗の教證を片州に興し、選擇本願を惡世に弘む。

と仰せられ、又『和讃』には、

智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきつゝ、選擇本願のべたまふ。

と仰せられてある。之は何故とならば、選擇本願即ち念佛で、親心即ち手織りである。故に手織りを着よとは、親心を頂けといふ事であるからであります。故に『大經』願成就の文に

聞其名號信心歡喜。とあるは、先づ其の名號の手織りの譯を聞けよといふ事にて、依て又親鸞聖人は此の聞の字を釋して『行卷』には

聞くといふは衆生佛願の生起本未を聞きて疑心あること無し。之を聞くと言ふ。

と仰せられてある。即ち此の六字の手織りを作りて下された親心は、一應二應の事ぢや無い。逆も外の着物の着れぬ者に此の一枚の手織りを着せんとて、五劫に思惟し、永劫に修行して、此の私一人の爲めにこさえて下された其の一部始終の佛願の生起本未を聞くのであると示し下されたのである。して其の親心の一部始終を聞いてハイと頂いた處が、即ち聞其名號信心歡喜である。即ち親の手織りを着たのであります。

其處で猶ほ茲を分り易く言ふと、法然聖人と親鸞聖人と、斯く言ひ方の違つてある所が有難いのであります。即ち法然聖人が親の手織りを着よと申し下されると、多くの御弟

茲なのである。親のまこと言つても、空では頂けぬ。即ち手織り、即ち念佛が其のまことの體なのであります。

一五

猶ほ之を前席來の私の話に合はすと、私が前席に斯く長く述べた事は、要するに私は他の着物の着れぬ者であつたといふ事を申述べたのであります。然るに私が以前理想的にやれるものゝやうに思つて居つたは、畢竟他の着物の着れるものゝやうに思つて居つたのである。然るに段々行き當りて、成る程着れて居らなんだ事が分つて來たのである。併茲で唯着れぬ者だといふ丈けては裸である。其の裸の私の爲めに、「着せや〜」の親心の塊りの南無阿彌陀佛の六字でましますのである。故に之を頂いた一念は實に天にも地にも唯一枚の手織りである。蓮如上人の『御文』には、

うれしさをむかしはそてにつゝみけり
こよひは身にもあまりぬるかな。

うれしさをむかしはそてにつゝみけりといへるは、むかしは雜行正行の分別もなく、念佛だにも申せば、往生するとはかりおもひつるこゝろなり。こよひは身にもあまりといへるは、正雜の分別をきゝわけ、一向一心になりて信心決定の上、佛恩報盡のために念佛まうすこゝろはおほきに各別なり。かるがゆゑに、身のをさどころもなく、おどろあがるほどにおもふあひだ、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこゝろなり。今宵は身にもあまるといふは、自分でこさえた今迄の宜い加減の着物と、親の手織りとの區別が分り、今迄の着物を脱ぎ

捨てた處である。即ち『改悔文』で申せば、もろくの雜行雜修自力のこゝろをふりすて、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへとのみまうして候。

とある處である。處が之が親が他の着物を着なと言はるゝから脱ぐのでは無い。即ち雜行雜修を仕てならぬと言はるゝからせぬのでは無い。着れぬものを今迄着やうと仕て居た事の耻しやと、脱ぎ捨て、今は唯天にも地にも唯一枚の手織の着物の難有やと、唯念佛して彌陀にたすけられ參らすべし」と一心に頂くばかりなのである。聖人の『和讃』には又

極惡深重の衆生は、

他の方便さらになし、

ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土にうまるとのべたまふ。

ひとへに彌陀を稱するが、即ち此の一枚の手織りを頂くのである。斯く手織りの着物を頂けば、着るの着ぬの問題は最早や消えて、自然に着ずには居られぬのである。即ち『歎異鈔』に、「念佛まうさんと思ひたつこゝろのおこる」と仰せらるゝが是である。即ち稱へずには居られぬのであります。て又『和讃』には、

彌陀大悲の誓願を、

ふかく信せんひとほみな、

ねてもさめてもへだてなく、南無阿彌陀佛をととなふべし、かく手織りを着る時には、着るといふ力み心は無くなつて、如何にも有難き御親心と、寝ても醒めても着ずには居られぬのである。即ち其の着る心は御恩報謝である。行經坐臥南無阿彌陀佛々々と手織りを着ながら、うらくと親心を喜ぶばかりなのであります。又『和讃』には、

彌陀の尊號となへつゝ、信樂まことにうるひとは、

憶念の心つねにして、

佛恩報ずるおもひあり。

之が即ち先きの『御文』に、「正雜の分別をきゝわけ、一向一心になりて信心決定の上に、御恩報盡のために念佛まうすこゝろはおほきに各別なり。かるがゆゑに身のおきどころもなくおどりあがるほどにおもふ間、よろこびは身にもうれしさがあまりぬるといへるこゝろなり」とある處である。斯く外の着物の着れぬ者に着せんとて、御苦勞下されし御親心と頂かねばならぬのである。すれば、斯く御苦勞をかけたは全く私が汗かきの亂暴者である爲めばかりである。『歎異鈔』には、聖人のつねのおほせには、彌陀の五劫思惟の願を案すれば、ひとへに親戀一人がためなりけり。さればそこばくの業をもちける身にありけるを、助けんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。

と、斯く頂けば全身あげて報恩謝徳の外は無いのである。又『和讃』には、

如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし。師主智識の恩徳も、骨をくだきても謝すべし。

既に今夏講習會も第三日と相成り、之より彌々深くなるばかりであります。のこる處は次席に申述る事と致します。(夏季求道會第三日第二席)

雜 錄

矜 哀 善 巧 錄

近 角 常 觀

○今年は年の始より頻々として火宅無常の警鐘が鳴り響きて、到る處に善巧攝化の御力があらはれて下さる、唯事ならず感ずる次第である。

○一月二日我が最も舊友にして最も親友なる秦敏之兄の次男次郎君がなくなつた、報知を得て、かけつけた、兄及び夫人が棺前に待して多くの人に擁せられながら、淋しそうであつた、秦兄は沈黙して居られたが、夫人が口を切つて此度こそは我慢の角を折られましたと叫ばれた。

○此眞摯なる告白によりて動かされた私は、直に戒められた。今後は法に心掛けねばならぬといふ様に考へらるゝならば、可かぬ、如何にも無常迅速を示されたはたしかに警告には違ひなけれども、是から聞法に心掛けるといふ様な廻り遠きことではない、次郎さんの死其物が人世の無常なることを警告するのみではない、直に大悲の親様が待ち兼ねて呼び掛けたまふ事實である、今後心掛ける位の事でない、今が今、即ち次郎さん自身が待ちかねたまへる親様の御心を示すべく善巧矜哀の御使であると御話した。

○秦兄も次郎の死は實に小なる事實である、されど人世無常

といふ緒を示されたものであると申された。いかにも一言なれど無常を感じられた事は骨髓に徹してあつた、そこで私が申すには、其小なる緒なれど其人生の缺陷を見て飽までも哀感攝受したまふのが大悲の御恵である、他力のやるせなき御心は我等が煩惱具足火宅無常の世界はそらごと、たはごと、まことあることなき有様を御覽あらせられて、其そらごとを憐みたまひて飽までも御見捨てなきまことが佛の御慈悲にてまします。

○小さな針の孔程の隙よりも光線がさしこめば、やがて室全體が明るくなる如く、次郎さんの死一つによりて人生の當てにならぬことが知れてみれば、佛かねて之をしろしめして當てにならぬ人生を徹頭徹尾あはれみたまふ御慈悲の光りは我等の心の中に充ち満ちて下さる、小なる緒の様なれど次郎さんの死は、やがて人生のすべてが當てにならぬことを示されたもので、其當てにならぬところを、かねて御覽なされて待兼ねたまひし御慈悲が、盡十方無碍の光明にてまします。

○秦兄は、かく色々話しつゝある間に今まで胸が張り裂ける思をなして、一層從來經營されたる事業を擲ち去らんかとまで餘地なかりし心が、忽にして軽々となりてふんわりと船に乗りた心地であると話された、實に盡十方の無碍光は、無明の闇をてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならず滅度にいたらしむ、との有様をいたゞかれた、又行卷に大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮びぬれば至徳の風靜かに、衆禍の波轉す、即ち無明の闇を破り、速かに無量光明土に到り、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也といふ御教化は事實となつ

○かくならるゝ前には秦兄は次郎の死は大海の一滴であるといふて、猶何か大なるものでも知らなければならぬいふ心組であつたらしい、夫人は次郎君の死其物に意味を見出すことに力を入れて、大に戒められたものと見て、今後益々努力實行によりて新たな人生を辿らんといふ心組であつたらしい、そこで私は大海の一滴はやがて大海全體を示すもので、人生の一滴が大海に入りて潮に一味になる如く、人生全體皆如來の恵によりて救はるゝのである、即凡聖逆滂齋廻入、如衆水入海一味なることを話した、且次郎君の死は戒めるためてなくして、此大なる御慈悲に導く於哀の善巧である、努力實行によりて新たな人生が来るにあらずして、いかなる努力實行も益なき人生を、飽まで於哀し給ふ御慈悲の光によりて新たにせらるゝのである、且次郎君の死其物に意味附けるのではない、寧ろ之によりて御慈悲其物をいたゞかしむるためである。

○夫人も色々と苦むて居られたのが忽にして心が、開發されて大安慰を得られた、特に夫人の母堂は著しく法悦の涙せきあへず、昨年失はれたる季女の君の事と共に深く於哀善巧の御慈悲を感じられた、葬式の當日再び訪ふるとき靈前に秦兄の歌が捧げられてあつた、曰く、今日よりはうらゝやつらと諸共に淨き光に照らさるゝなりと、法名は釋淨光といふのであつた、九段の講話と差支て葬場へよく參らなかつたが、仄に聞けば式場に於て來會者に向て君の胸中を告白されたといふことである、信ぜられぬときは信ぜられぬと率直に告白する同君は、一たび光に接するや暫くも黙して居られぬのである。

同志が方針を異にする事になつた、而して十七年ぶりに共に信仰を語るやうになつた、古の所謂靈山會上の契を再び實現する様な心地である、是を縁として毎月一回講話をシンガ一學校樓上に開くことになつた、實に可憐なる穎悟なる敏活なる次郎君が、我等に與へくれたる善巧攝化の力である。

○かく他家事のやうに思ふて居る間に忽にして我家の事になつて來た、弟常音の妻が十二日夜産氣づきた、我妻は終夜つききりて世話をしつゝあつた、産婆が水の出たのを氣にして居つたが、産科醫が從來診察して異状なきのみならず、至極發達宜しきとの事たりしゆへまだ安心して居つた、十三日朝に至りて初めて位置に異状あることが分つた、産科醫が駆けつけて呉れた、非常に案じたが無事に男兒が誕生した、容貌柔和で正直をうて、其輪廓が全く我等が亡父其儘である無事に生れた喜と、産婦を案じるの餘、月足らずに生れたために、非常に弱かつたことに割合に想到することが少かつた、今から思へば我長女光子と全く同じ経過をとつてある、其處へ數年なき極寒で特に其頃は厳しかつた。

○名を附けて呉れとの事て、實は數日前經文を読み無上正眞之道といふ文字を見て少からず感じた、正眞といふ名は頗るよき名であると考へつゝあつた、そこで熟考の上、十五日の朝、之を奉書紙に認め、經文並に祖語の典據まで書き列ねた、如何にも令名であると我乍ら不思議と思ひつゝ、我子文常、眞觀と共に聖人の正意、眞宗の眞髓を傳へがしと念じつゝあつた、弟は名が善すぎはせぬかとの事であつて、私はよければますゝよいてはないかと、ますゝ之をすゝめて居た、

○其後兄が主宰するシンガミシン會社の東京に於けるすべの社員を集めて講話を開かれた、其前に兄が自ら經驗せられたるところを述べられた、兄の述懐に曰く、從來自分は自ら欺かず、他人に厄介かけぬといふことに於て人後に落ちずと考へ、今日の所謂坊主の如く自ら信ぜられもせぬことを信じた様に吹聴して、衣食するといふことを潔とせず、金錢を欲するときは表面堂々として標榜して商賈して金を得る、少しも心に疾しき所はない、十數年は心苦しき宗教家生活を脱して、却て平安を得つゝあつた、而して是よりは益々身體を健康ならしめ益奮闘せんと思ひ、馬の稽古を初め、二日の朝も稽古から歸つて來たのであつた。

○次郎の悪いといふので三階の病室に上りて見れば、醫者は人工呼吸を頻りに試みてモイイカヌ〜と言ふて居る、麻疹にて喘息を起し、痰がつまつたのであつた、遂に空しくなつたのである、ア、人間の智識の及ばぬは是程であるが、實に此度こそは眞に宗教の味が分かつた、今より顧みれば從來は宗教は實に文明的の裝飾品として居つたに過ぎなかつた、此貴重な品を、僧侶や牧師が粗末にするから、其價值が分らないと結局批評的態度に過ぎなかつた、實に自分自身の爲であることと味ふことが出来なかつた、今では實に人生缺くべからざる必要を知り得たとて、社員に對してすゝめられた、私も其席にて御話した、回顧せば明治三十年本山改革の時、同君は當時宗教界の有様と、青年の消極的態度に嫌らずして方針を變ぜられた、私は同君の如く手を放つ事が出来ぬため、宗教界に止りて煩悶して信仰に入つた、當時までは共に駢馳して居た親

弟の心では恰も我長女の光子といふ名をつけたとき、如何にも崇高に感じたと同様に、人間ならず感じたらしい、午後に至りて有田君宛の長々とした手紙を認めつゝあつた、これは十八日に同君の宅の報恩講に、九州の御同朋が會合する筈であるから、昨年未已來我が家庭を初めとして、我同朋の間に起りつゝある信仰上一段の自覺につきて書きつゝあつた。

○産婆が洗ひに來りて頗る弱つて居る事を言ふて來た、多少は心配はして居たものゝ、前夜産科醫も何事もないと云ふものゆへ、其日の午前の如き三時間も産婦に抱かれて居たのであるが、氣が附かんののである、忽にして醫者を招く、其紹介によりて小兒科の醫者を招く、小兒専門の經驗ある看護婦二人を雇ふ、親類の代診はつききり、俄に瓦斯煖爐を備へる、障子の目張りをする、出來得るかぎりの手段を盡した、されど甚だよくない、實に胸塞がり、喉つまる心地がする、弟は斷腸やる瀬なく、産婦に知らさぬ様に外に出て男泣をして居る、萬一の事ありて産婦に障る虞があるといふて産婆は生兒を我家に移さんといふ、いかに尤なれど此場合生兒が可愛そうである、又母親も隣室で看護して居るのを見て居るのが、寧ろ安心であらうと察したから斷じて移さずに介抱することにした。

○併容禮が段々險惡になつて來た、皆の人が必死になりて力を盡した、妻は自分の乳を搾りて飲ませる、私は亦小兒科の醫に走る、看護婦は人工呼吸をする、妻の親は來りて注射した、弟は悄然として生兒の顔を見守りて居る、小兒科醫がかけてけたが残念な事には遂に事絶えた、南無阿彌陀佛、嗚呼可憐の極である、僅かに三日の人生、亡父の面影、とても唯事と

は思はれぬ、全く大悲矜哀の善巧實に厳しき御催促である、午後九時二十分であつた。此時産婦はまだ知らぬのである、前に移轉さすのを拒んだ私は、残念で御坐りますと挨拶する醫師や看護婦を制して、産婦に對しては大學病院へ入院さすと言ひふらした、産婦は不思議にも全く之を信じて、弟に言ふには全く死ぬのであつたが入院して善かつたといふ、下女に對して病院へ小供の着換を持って行きて呉れと言ふたとして、下女が泣きぐづれる。

○其夜は私かに我家にて通夜を爲し、かつて我長女光子が生後五十日餘を経て、死んで横はりたる室に横へて、其時誦したる和讃、彌陀觀音大勢至、大船のふねに乗してぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふを再び誦したときは、かくまで度々の御催促を蒙ることかと、ひたすら無上正道を仰ぐばかりである。弟は心の底に穴か明きたやうである、掌中の珠を奪はれたとは、如何にもよく形容したものであると、底なき寂しき間に深き御慈悲の御恵みを仰ぎたてまつりて居る。

○翌日は親友、近隣、學舎諸君の深き同情を蒙りて、其夜學舎に於て通夜をして、無上正道の境界より穢土の我等を待受け給ふことを仰ぎた、今生夢のうちのちぎりをしるべとして、來世のさとのまへの縁を結ばんとなり、われおくれなば人にみちびかれん、われささだ、は人をみちびかん、生々に善友となりて、互に佛道を修せしめ、世々に知識として、ともに迷執をたゝん、實に正眞は我等が爲に善知識である。越えて十七日學舎に於て葬式を行ひ日暮里にて茶毘を行ひ、十九日拾骨

し、中陰壇をかざりてあるのである、而して心ならずも産婦に

はまだ知らざぬのである、如何にも罪深き所爲である。併、産科醫の嚴禁する所である。如何にも致方なき世の有様である。○夫につけても巢鴨監獄の教誨師花木君につきて同情する次第である。同君も此頃出産ありて兒も早世したのみならず、産後の爲、夫人も逝去されたのである、來書に曰く逝去の當日夫人の父と君とが枕邊に坐して、左右より生れて初めて眞の説教を致し候、死の宣告をきゝて如何に悶えるかと、そののみ懸念致し居り候ひしに、想像とは全く反し、殆ど驚きの相なく、兩人の一言一句を深く味ひ、何等の疑念もなく、如何にも美はしく眞信を獲得致し、夫より苦しき中より稱名の聲絶ゆることなく、枕邊に坐せる兩親兄弟及君、主治醫等にまで厚く禮を述べ、念佛諸共眠るが如く逝去されたのである、同君結婚後未だ一年も経過せざる今日、かゝる悲惨なる死別をなさねばならぬ事として、彼を思ひ此を思ひ、萬感胸にせまりて云ふ所を知らず、如何にしふるとき私も、此度こそは念佛のみぞまことにておはします事を味ひ、廣大なる御慈悲に醒め申候とある。

○最後に言はねばならぬ悲しむべき事は、求道會御同朋にして近代の妙好人とも言ふべき、生沼夫人か去る二十一日午前三時二十分に美はしき往生を遂げられたことである、同夫人のことは告白にも出てあつたが、今より六年前氣管の病氣にかゝり、とても助からぬとなつてから、良人は獨逸に留學せられ、二人の小供に養母實母と生別死別せねばならぬとなつたとき、王耶經を讀み、一旦は坐禪をも試みんとせられた時、すべての境遇、すべての心、かねてしるしめして御見捨てなき

御慈悲なりと一席の講話にて眞心徹到踴躍歡喜の人となられたのである、夫から不思議なる哉片肺なきにも拘らず、かたまりて仕舞ひ、法悦三昧の日暮をせられたのである、一昨年の夏期求道會の時などは、毎朝早く學舎に飛んで來られたのである、其姿が見えるやうである、毎晩の信仰談話會にも缺けられたことはなかつた、加之大磯の講習會へ家族一同を引き連れて出席したとき、加藤實母と同道して來られたときなどは、實に法悦の極に達して居られた、私が九州傳道を経て朝鮮へゆくとして大磯を出立したとき、我家族一同か鎌倉へ同道して御世話になつたことなど、實に髣髴として見える様である。

○一昨年の秋御主人は歸朝せられた、度々御宅に於て家庭講話が開かれた、人を信仰に入れるにかくまで熱心な方を見たことがない、實母の加藤照子さんも、叔父の竹三郎さんも、親友の岡田夫人も、皆夫人に引入られた、清水かつ子さんの如きは生沼さんの様子を見て、初めて眞の信仰はかくなげねばならぬと思ふて、夫から信仰に入られた、清水さんの此度の告白は存命中に御目にかけたかつたなれど、我家に前記の取込の爲め、延刊して間に合はなんだのは申譯がなかつた、特に最後に最も熱心であつたのは御主人を信仰に引入りたいとの赤誠である。

○本月の六日に鎌倉に病床を訪問した、是が此世の別れてあつた、御主人は前日より往きて居られた、養母は二人の子達を連れて後から來られた、又昨臘特に頼まれて歎異欽第九章を書きたのを持來つた、これは二人の子達に兄さんにはかつて書きて上げた御名號を形見に之を弟さんに形見に遣さんとの

思召であつた、枕頭にて御主人に、大悲の親様は私の惡しき心をしるしめして、御見捨なきやる瀬なき御心なることを話したときに、面を背けて感涙に咽ばれた、實に長々の念力が届いたのであつた、恰も聖徳太子磯長廟願文を書きたのも持て、行きて眞宗家庭の同心一體の信仰につきて話した、其通り實現された、養母も亦喜ばれた、終日御話を爲し、子達も常に病床の側に頭是なく遊んで居られた、夕方に至りて特に一羈車を後くらして私は母上子達と同道して歸りた、あれが御子達との別れかと思へば實に涙の種である。

○平生歎異欽第九章を喜ばれ、特に病氣再發後はいつも佛かねてしるしめしてとあるをくりかへして喜ばれた、小出さんや峠さんや爪生さんなどか御尋になりたときも、此一語を申されて御互に語が出なんだといふ事である、私の行きた時も、今までは此御語を思ひ出せば、悪るかつた、濟まなんだ、苦しかつたと過去の語て申しましたが、今は死が眼の前にありまするから、苦しいま、悪いま、罪のま、御たすけにあづかるのがありがたい、死なんざるやらんと心細くおぼゆるも煩惱なれば、其時は如何にせんかと心配するも煩惱である、さればこの煩惱のま、御助けがありがたいと申された、其後御主人は日曜毎に二度往かれて、廿日の歸るとき戯れに、肩が疑るから打てくれと申されたれば、肩を打てあげてコロリと死ぬるならば打て上げると申されたとのことであつた、其夜起上りて私の書いて上げた歎異欽を看護婦に話してきかせ、三度までも繰り返へし、看護婦にも讀ませて懇々と話をなし、稱名の聲絶ゆることなく、二十一日午前三時二十分頃に至りて咳

を二つせらるゝなり、自然に安らかに歎異鈔の御文の如く、
 婆娑の縁つきで力なくして終るときに彼土へまゐられた、實
 に徹頭徹尾歎異鈔を體現されたものである。南無阿彌陀佛。
 ○鎌倉にて茶毘に附し遺骨を奉して歸京せられた、母上是非
 にとの望によりて法名をつけた、歎異鈔の文字を用ゐて悲愍
 院釋尼淨行と名けた、爲諸庶類一作不請之友、荷負群生爲
 之重擔、受持如來甚深法藏、護佛種性、常使不絕、興大悲
 愍、衆生、演慈辨、授法眼、杜三趣、開善門、以不請之法、施
 諸黎庶、如純孝之子愛敬父母、於諸衆生、視如自己の御文
 はいかにも御性質に叶ふてある如く感ずる、又家は禪宗であ
 るゆへ、其宗の葬をして呉れてもよいとの遺言であつたが、其
 通りにせんとすれば、存命中に自分も親にも夫にも先立ち、
 子供を育せず、何一つ家に盡したることなけれども、信仰を家
 に遺したのが唯一の仕事じやと言はれたことが思ひ出されて
 仕方がない、遂に本人の信仰を尊重して、駒込眞淨寺にて二
 十七日午前二時眞宗儀式にて送葬せられた、御同朋が心から
 御送りをして、實に信仰的に崇き尊き式であつた、法性眞如
 界よりこの有様を照見したまふことであらう、南無阿彌陀佛。
 左に掲ぐるは生沼母上に送られた法話の手紙である。

またもや降りいていとつれつれに御座候。さぞや何に
 をかやと事々に御心せはしく一増御こゝろを勞され候御事
 とまことに恐入申候。御かげ様にて最早熱も引きし
 様にさふらへば、先々御安心下され度候。萬は曹六より御さ
 へとり下され度候。唯今も最早おひるかと思へば、やつと
 九時十分過ぎ、少し早くおさるとかくの結果、おかしき程に

生も、無常なる世も、何の何のいふべき事の候哉、唯此の
 御慈悲だにあらばと、そののみ心づよく悦ばしく嬉しく南
 阿彌陀佛々々々々と、嬉しいにつけかなしいにつけか
 ん謝致し居り候。

何とぞ不順の折から御大切に、何事も彌陀にはからわれ候
 身に候まゝ、あまり御心配なくおまかせ申します。御慈悲
 を御悦び下され度萬々念じ上參らせ候。此頃は誠に手がふ
 るへ、一本の手紙は半日もかゝり申候。唯今母参りよろし
 く申候。先はこれにて筆をとめ參らせ候。かして。

六月五日

今日は實に感謝にたえかね申候、いよ散會の日とて淺
 草別院の奥書院に集り、御開山上人御眞筆の御本書を拜し、
 是は實にとくべつの御思召、唯此度にかぎり御法主の御ゆ
 るしを得、求道會のために數々の御手數を経て、おさ
 をがみ申候。南無阿彌陀佛。

實に此度は私もいよ如來の廣大なる御慈悲を、ます
 く信じさせていたゞき、實に申様もなく悦ばせていたゞ
 き、唯々感謝にむせび居申候。それにつけても我身の罪の
 深き事、仕て見様なき煩惱具足の凡夫、親にも子にも實に
 あかせぬ程のあさましき胸の中、其あさましきよい心のお
 こらぬ其者が、眞に佛はあはれなりと思召し、其やるせな
 き御心より助けてやりたい、どうかすくうてやりたいの御
 親切より、五劫思惟の願を起したまひ、ようごうの御修業
 をつまれ、さあ我は汝にかくまで難儀をして本願を成就し
 たぞ、さあ此上はよい事をいかに仕度いと思へばとて、と

御座候。もとより病は死のたよりとかや、されども凡夫のあ

さはかさ、平生何事もなき時は、實に口先きばかりにて、無
 常の世の常、浮世のならひなど、誠こうまんに申居りさふ
 らへども、事なき時はみな上のそら、眞實此胸にひつしと
 ばかりにかんじ悟り候時が、眞に無常をかんじ候時に御座
 候。平生ごう成とはかゝる時初めて、ほんに無事なる時、事
 なき時平生が大切に御座候。私も此度と云ふ此度、日頃お
 さかせいたゞき居り候御かげ、つくく身にしみ、唯々や
 るせなき御慈悲を悦ばせていたゞき居候。つらく思ひ
 候に、世に私程罪深き者はこれなく、何のなすこともなく罪
 のみ重ね、最早私の立場は一寸の餘地もこれなく候。かゝ
 る罪業深重の私、思へば思ふ程仕て見様これなく、もし兼
 ての御さかせなくば、あゝ勿體ない何に不自由なくこんな
 やつを。これと申すも御佛様の夜ひる此身につきそひ給ひ
 その廣大の御慈悲あればこそ、實にかゝるわびしき賤が身
 も、尊い親様の御そば、今日も明日も悦びづめによるこびて
 もあきたらぬ幸福に候を、ややともすると煩惱を起し、人生
 のはかなさをかこち、病のくるしさをなげき、もしまたうれ
 しき時は病もうちわすれ、なきつわらひつ實に氣ちがひの
 如き有様に御座候。かゝる身心ともにかたわの其私か、其か
 たわがかわいそう。其ませうになれぬそれがあはれてある、
 さぞやつらからう、さぞや苦しからう。佛兼ねてしるしめ
 し、もう御前の心はよく知つてしつて知りぬいて居る、
 「汝一心正念にして直に來れ、我よく汝を守らん」最早唯御
 一佛あるのみ、かゝる大慈大悲の御親ある上からは、うさ人

ても何一つ我力にて及ぶ事なき仕て見様のなき汝を、
 我はすくわん爲にかゝる修業をもせしなれば、汝は唯此の
 親のやるせない心をさいてくれよ、かゝる大悲の親ありと
 知つて、來れよ、其なやみの多い人生、其無常の世界に唯ぼ
 んやりとして居るが如何にも可愛そうなのであるぞ、
 ぬのだ。其地獄一定の其者が殊にかわいそうなのであるぞ、
 あわれてあると、此大慈大悲の御親ばかりは、此私の心中
 をよいもあしきもしりぬいて、たすけにやあかぬとの御誓
 願、ああ有難や勿體なや、此極重の罪人をかくまで佛は思ふ
 て下さるかや、もうあゝもこうも思ふて見る餘地はない
 呼鳴何としたる我身は仕合せ者と、唯一心に感謝の御稱名
 より外は御座なく、とても口にも言葉にも、其悦びは
 たえはて申候。南無阿彌陀佛。

明治四十四年七月十六日

此日頃は何とやらおほく筆とる事も致し申さず、唯あけく
 れ煩惱にまなこさゑられ、また思ひ出しては心づかせいた
 ゞき、かゝる病苦の中よりも悦ばしていたゞき居申候。此度
 といふ此度の私の心もち、とても筆紙には盡しがたく、ま
 たくるしき言の此言葉にても申がたく、何卒折あら
 ば近角先生より御さへとり下され度候。それは信仰に
 入るの一念其時よりつとそれはいよ一分一厘も餘地
 は御座なく候。かゝるがへればかゝる程罪のふかさ我身、
 實にあたまのあげ様もない仕方のない此私、罪は罪のまん
 ま、煩惱はくるしむ其まんま、實に有りがたい、きれいな
 つて極樂へ参りするにはあらで、地獄行の其すがたで早助

信仰界

錢拾八金年半 錢五拾價定 十二行發 日一月一

家庭叢

- ▲日曜學校教授
- ▲大聖釋尊 古帆
- ▲馬の說法 井上青嵐
- ▲隨緣寸感 嵐峽生
- ▲同人消息
- ▲新刊雜誌

信仰上より人生

前田、南條、谷本、藤岡、加藤、智博士、清水、友次郎、高島、米、松島、田、山、鈴木、諸、勸學、島地、大等、弓波、孤嶺、服部、龍嶺、小笠原、大、成、世、河、顯、了、劉、谷、哲、公、導、氏、河、顯、了、劉、谷、哲、公、八、尋、慈、薰、氏、岩、橋、通、成、井、上、氏、道、元、淨、見、氏、濱、口、惠、章、氏、花、田、凌、雲、氏、高、木、撫、堂、氏、外、家、の、社、諸、同、人、合、せ、て、東、西、五、十、餘、家、の、説、を、簡、載、す

京 都 行 發 都 京
社 誌 叢 教 布
分 院 書 教 典 座 口
(五 一 八 〇 一 阪 大)

每號連載

- 社 説 富井 南軒
- 法 話 利井 勸學
- 談 話 赤松 勸學
- 語 錄 眞宗 先哲

每號連載

- 葬祭 儀禮の 杉 紫朗
- 批判と信仰 高雄 義堅
- 蓮月尼 黒瀬 知圓
- 善定寺 不 西 谷 生

宿命號

行發日一月二十 容内 讀必々句々言

- ▲日本文學上の宿命思想……文學博士 佐々 醒雪
- ▲歐洲文學上の宿命思想……早大教授 島村 抱月
- ▲古代思想上の因果觀念……文學博士 加藤 玄智
- ▲史上の成敗興亡と運命……代議士 竹越 三又
- ▲必然論と自由意志論……文學博士 中島 力造
- ▲宇宙の大根義と宿命論……法學博士 岡 克彦
- ▲人生の大疑問と宿命論……文學博士 村上 專精
- ▲豫定説と自由意志説本源……海老名 名彈正
- ▲神道に現はれし宿命論……奉齋 長藤岡 好古
- ▲儒教の天命論の根義……早大教授 牧野 謙二郎
- ▲基督教の攝理説の根義……司 教セルギ
- ▲佛教の宿命論の根義……宗大 學長 大鹿 愷成
- ▲我輩の非宿命論……仙 翁 大隈 重信
- ▲私の神秘的經驗と運命觀……江原 素六
- ▲私の世界觀と宿命觀……代議士 尾崎 行雄

- ▲土俵上の運不運觀……横 綱太 刀 山
- ▲易の原理と運命判斷法……高島 嘉右衛門
- ▲私の實驗せる不運豫防法……安田 善次郎
- ▲死刑臺上強盜の宿命觀……監獄 教海 師柴田 英之
- ▲國木田獨歩の叫びし宿命……早大 講師 吉江 孤雁
- ▲我夫の死と私の宿命觀……鳩山 春子
- ▲相場道と好運必勝經驗……新 宿 將軍 濱野 茂
- ▲妖怪談中の宿命論……水野 葉舟

錢十圓分一錢十圓分半五一一(共郵)價定

九〇二東口貯振 會協教宗本日大 十木町淀東 所行發

宗教の日本

大谷派専用の勤行には立花慧明師指導の下に各種の節譜を附す

大谷派教學部長 連枝 大谷瑩亮師序
本願寺派前布教總監 連枝 梅上尊融師序

御注文の節は本派専用真宗
聖典又は大派専用真宗聖典
と記入して御注文被下度候

増補第十版 出來

眞宗聖典

製本 五寸一分 横三寸六分
紙 全紙 全紙 全紙
上等製本 金網衣裝三方金
極上等製本 黒色總華三文字
並製本 クロ一ス 銀金文字
特製 定價金一圓七十錢
極上特製 定價金一圓五十錢
並製 定價金一圓二十錢

完全無比の眞宗聖典は編纂せられたり。初めに勤行用として三部經、正信偈、御文章(御文)等の全部を網羅し盡したり。次に信念修養の資料として三部經和譯、教行信證和譯、教異鈔、御一代聞書等二十四部、其他の假名聖教十數部の抜粹、七祖聖教十數部の抄譯あり。内容の豊富なる、裝釘の優雅にして輕便なる、實に眞宗聖典中の大王なり。十七版にて約五萬部賣切れたれども未だ一般の要求に應ずること能はず今回更に文類聚鈔和譯、愚禿鈔和譯、二門偈和譯、三經往生文類、尊號銘文、一念多念證文、唯信鈔文意等を増補す、之に依りて親鸞聖人の全書は本書の内に收むることとなり。尙ほ本派専用の勤行用の内梵唄集及禮讚を増補し之に本派梵唄の泰斗澤圓師指導の下に五音を附し其要所々々に譜名を記入したり正信偈には中拍子の章譜を附す。大谷派専用としては大谷派聲明の泰斗立花慧明師指導の下に伽陀、文類行四句目眞四句目、念佛和讃二三洵、五洵、式間念佛、經後念佛、舌々念佛、に節譜を附せり。之に依りて勤行用としてまた信念修養の資料と洵、しても實に缺くる處なきは本書也。請ふこの大増補を行へる廉價無比なる特價提供を逸する勿れ。

二千部 特價 一圓二十錢 一圓 七十錢

本願寺派専用の勤行に澤圓師指導の丁に梵唄禮讚にまで章附を附す

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰

參版 定價七十錢 郵税八錢 綴

信仰之餘瀝要略

三版 定價五錢 郵税三錢 用

冠唯唯 信鈔文意鈔

初版 定價七錢 郵税二冊迄二錢 施本用

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

近角常觀序 鈴木龍司著

入信之徑路

定價卅錢 郵税四錢

求道昨年度分合本

定價九十錢 郵税八錢

申込所 東京市本郷區森川町一 振替東京一六六九六番 求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回二十日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 一六ヶ月 一年 郵税一冊
 金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 に付五厘
 ●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

大正二年一月二十七日印刷
大正二年一月三十日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
求道發行所
(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區表神保町 東 京 堂

前號要目

求道

◎他力の眞義

講義

◎『教行信證』信卷三信釋

第二席 至心釋(人生問頭)

近角常寛

雜錄

◎度みて元良先生を悼す

告白

◎寛く大きい御思召

某婦人

◎信仰書翰三章

一

原田三耶

二

菅野久子

三

柳川こふく

講話

◎如來は常住にして變易有ることなし

(明治天皇御送葬講話)

近角常観

時報

◎隨處隨緣

Vertical text on the left margin of the page.